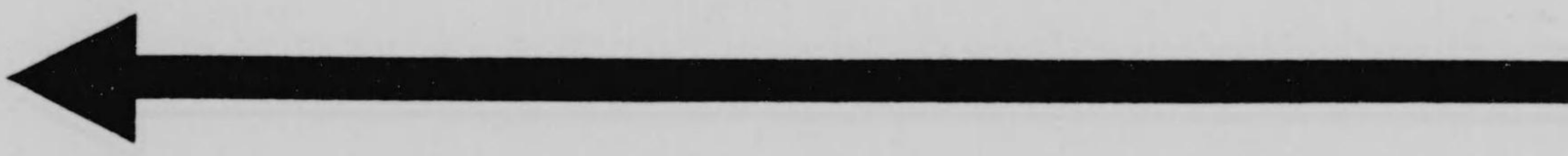


363
273



始



363-273



演
說
法
講
話

東
京
水
野
書
店
發
兌

大正
6. 10. 1
内交

凡 例

一 演説は聴衆を相手にせざるべからず、本書は主として聴衆の心理状態に立脚して其の方法を説かんと試みたるもの、説いて未だ精しからざれど、初學者し其の要點を捕捉せば、思想傳達の上に於て必らずしも無用の講話にあらざるを知らんか。予が舊著雄辯法は主として修辭論理の方面より講説し、本書は多く群衆心理より立言す。これ稍々其趣を舊著と異になす所以。しかも講説の順序として彼れにいふ所をも反覆したるもの少からず、これ本講話を獨立せしむる上に於て已むを得ざるのこと、讀者多く咎むるなくんば幸なり。

一 他に向つて思想を傳達するに説話あり、講解あり、演説あり、討論あり、本書は其の通俗講話に關するものを略し、主として意見の發表を旨とする演説

を主とし、如何にすれば聴衆をして自己と共鳴せしめ得るかを中心として講述したるものにして云ふ所平凡なりと雖も、多くは予が乏しき経験に於て得來り、先人も亦此言を爲すもの、讀者若し本書を素地として更に一段の考慮を運らさば自己の思想傳達の上に於て得る所少からざるべきか。粗雜の言、金玉を此の中に得るは一に讀者の工夫に存す。

一卷末附する所の一文は米國ウイコンシン大學教授ダツガー氏の演説法中の一節を基礎としたるものにて吾等の學ぶべき所少からざれば特に附して初學に便せるのみ。

丁巳仲夏

咄堂識

演説法講話目次

一 雄辯の性質	一
演説の三要素	一
雄辯の定義	四
話の分類	七
基礎學科	一〇
藝術としての雄辯	二
二 演説と言語	二四
言語と觀念	二四
言語は符號	二七
言語の豊富	二八

言語選擇の三標準……………三三

三 演説と音聲……………二四

演説の巧拙……………二四

音聲と聯想……………二五

音書……………二七

摸聲と摸形……………二九

音の性質……………三〇

母音、子音……………三一

齶音、舌音、唇音……………三三

濁音其他……………三四

語勢……………三五

音調……………三六

四 演説と修詞……………四〇

修詞の原理類……………四〇

類似的修詞法……………四二

譬喻事例……………四三

譬喻利用の心得……………四六

寓喩……………四七

想化法……………五〇

反對聯想……………五四

接近聯想……………五八

提喩……………五八

換喩……………六〇

五 演説の材料……………六四

構想……………六四

構想の要點	六五
話材の蒐集	六六
格言	六六
和歌俳句	六八
數の提示	七一
話材としての譬喩	七三
挿話	七六
涅槃經の八喻	七九
六 演説の構想	八一
構想の原則	八一
虚偽の論法	八五
論點窃取の誤謬	八八
論旨相違の誤謬	九〇

感情に訴ふるの弊	九一
材料の整理	九三
全體の構成	九四
七 聽衆の心理	九七
聽衆と群衆	九七
群衆心理の特色	一〇〇
群衆の感情は頗る簡單	一〇二
雄辯の心理	一〇四
八 演説と暗示	一〇八
暗示の力	一〇八
群衆の被暗示性	一一〇
被暗示状態	一一三
會場の整理	一一五

威嚴……………	二六
説述方法……………	二七
斷言と反覆……………	二九
暗示と人格……………	三二
九 感情と表現……………	三三
心身の相關……………	三三
自ら感せよ……………	三五
情緒の發出……………	三七
聲音と感情……………	三〇
身振手振……………	三三
一〇 演説の準備……………	三九
演説の動機……………	三九
思想内容の整頓……………	四〇

讀書と觀察……………	四二
現實狀態の視察……………	四五
名士の苦心……………	四七
一一 壇上の心得……………	四九
辯士の資格……………	四九
自信と態度……………	五一
聴衆と會場……………	五一
音聲の透徹……………	五四
圖表……………	五六
一二 演説の實例……………	五七
辯士と聴衆……………	五七
ブルータスの演説……………	五七
アントニーの演説……………	六一

自己の工夫……………一六七

附 録

演説の性質と職分

談話の形式……………	一
演説……………	四
題目……………	五
對偶……………	七
總合法……………	七
附加の例證……………	八
傳記に關する演説……………	九
適合の法則……………	一一
題目の選擇……………	一二

資料の蒐集……………	一五
形式上の分類……………	一九
前置の詞……………	二〇
討論……………	二四
結論……………	二八

演説法講話目次 終

演説法講話

加藤 咄堂 著

一 雄辯の性質

演説の三要素

私はこれから演説法に就ての講話を始めんとするのであります。此の講話を初めるといふ單なる事實に就ても、こゝに吾等は三つの要素を見ることが出来ます、即ち講ずる私と聽く諸君と、而してその兩者を繋ぐ所の講話と云ふものとであります。演説法の出立點はこの三つの要素の上に在るので、若し私の言はんとする思想と、これを聽く諸君との間に何の關係も結び付けもなかつたならば、この講話は全然無効になつて了ひます。若し私の思うた處を何の思量も用ゐず、諸君に解



るか解らぬかを頓着せずして話し、諸君が亦、何の興味をもこの講話に惹くと云ふこと無く、又そんな事は百も承知であるとか、又はむつかしくて少しも分らぬと云ふのであつたならば、諸君と私とは別々になつて恰も並行線の相台するものないうやうにこの講話と云ふものゝ意味をなさぬことになります。この講話を有効ならしむるには、諸君と私とを結び付けると云ふことが何よりも必要であります。如く、演説法と云ふものは理想と現實との衝突より出立して、それを近づけんとする努力に依つて現はれるものと申すことが出来ます。

こゝに一個の辯士があつて、その辯士の理想とする所が、現實に於て完全に行はれ、何人も反對せぬものであつたならば、別に演説をする必要は無いのであります。自己の理想とする處が現實に行はれて居らない、之を如何にしてか現實に行はしめんとする努力が演説となるのでありますから、演説と云ふ事實の行はれるのは、少くとも言論の力に依つて自己の思想を發表して、之を實現し得ると

云ふ時代で無ければならぬので、彼の專制政府の時代に於ては、何事を言つても二三當路者の自由意志に依つて左右せらるゝ外、自己の理想を實現することは出来なかつたものでありますから、演説と云ふことも、雄辯と云ふことも發達しなかつたのであります。今申しました理想と現實との調和、これが雄辯研究の三要件であり、それが演壇の上に現はれて理想の代表者は辯士となり、現實の代表者は聴衆となり。それを調和すると云ふことが即ち演説となつて来る譯であります。から、一つの演説を構想する上に於ても、必ず主題と、それに對する對偶とその綜合との三つが無ければならぬのであり、之を準備するのに就ても、辯士はその言はんとする處の題目に精通すると云ふことが一つの條件であり、又如何に題目に精通して居つても現實の觀察を誤つてはその演説を有効ならしむることは出来ないで、この題目の精通、現實の觀察、之に加ふるに演説の方法と云ふものがあつて、初めて雄辯は成立するのであります。が實際社會に於て語らんとする題目

は實に多いので、題目の精通それには殆ど上は百科の學問より下は日常の經驗に至る迄すべて悉く來つて演説の主題となるものでありますから、今茲にその一々に付て語ることは出來ませず、又現實の觀察と云ふことに就てもこれには精細に世態人情を見て行かねばならぬので、それは時に依り所により、さまざまの別があるものでありますから、是れ亦この講話の中に完備せしむることは出來ないのであります。今本講話の範圍として語らんとするのは、題目の精通とか現實の觀察といふのでなく其の現實と理想とを調和する方法に就てでありまして如何にすれば言論の力を以て自己の理想を實現せしむることが出来るかと云ふことに外ならぬので、演説法は實に此上に成立つものと言はなければなりません。

雄辯の定義

そこで此演説又雄辯のことに付ての先人の考へを述べますればアリストテレート

は之れに定義を施して雄辯とはその言はんと欲する處を言ふの術であると言うて居ります。成程言はんと欲する處を言ふの術には違ひありませんが、單にそれだけでは雄辯術を正確に定義したものは申されません。羅馬のクインチリヤンは雄辯法とは「巧みに語るの學問」であると言うて居りますが、唯々巧みに語ると云ふだけでは未だ充分では無いのであります。英の文豪マコレー卿は演説の目的は獨り眞理を語るのみで無く對者を説服するに在ると云ひ、彼の有名なる哲人エマーソンは雄辯の目的は數時間又は數分間の談論を以て、數年間の確信と習慣とを變更せしむるのであるといひ、單に語ると云ふ上に更に力強く説服すると云ふことの必要なるを示し、有名なる米國の雄辯家のウェブスターは「雄辯は聽衆をして共通の感情を鼓舞せしむるに適當なる態度を以てその強烈なる感情を表示しその深奥にして力ある思想と常に能く選擇せられたる言語とを以て平易に且つ優雅なる語調の中に包まれるものである」と言ひ、バックレーの雄辯法には「聽者の

意志をして判断を起し理解を高め、心を動かすの勢ひたらしむ」といひ米國キス
コンシン大學の教授ダッギーは、雄辯法に對する定義を與へて「個人並に群衆を
説服し、以て一定の方向に赴かしむるの技術である」と言ひ、更に演説の目的を
示して「聽衆の智力に對して論證すると共に一方その感情に訴へて、辯士の意を
首肯せしむるに在り」と言うて居ります。一層解り易く申しますれば、演説の目
的は、自己の知る如く他を知らしめ、自己の感ずる如く他を感せしめ、自己の行は
しめんと欲する如く他をして行はしめると言ふのに在ると申すの外はありません
之れによりますると一概に演説と云うて居ることが自から三つに分れます即ち知
らしめると云ふことを目的とするのと單に感せしめると云ふことを目的として居
るのと唯々知らしめ感せしめるのみならず、進んでそれを首肯せしめんとするこ
とになります。通常講話とか講義とかと云ふものは知らしめると云ふことが主と
なり、説教と云ふやうなものは感せしめる事が主となつて居るのでありますが、

それも唯主となると云ふ丈で、相互に相關聯して分つことの出来るものでな
く結局の處は知らしめ、感せしめ、而して説服して首肯せしむるに在るので、言
を換て申しますれば我と云ふものを擴大して對者を包容し若くは我が舌端より進
り出る言語を對者の心裏に吹き込むと云ふことが其の目的とする所であります。
それであるからこの演説法に於ては單なる獨白、即ち「ア、終つた」とか「ああ
、美しい」とか云ふやうな咏嘆的の獨語は暫く研究の以外に置きまして、其の主
とする所は他をして自己に従はしめんとする言論の力を指すのであります。

話の分類

一體人が言葉を出すのは二つの別があります。一を獨白と言ひ他を複白と申し
ます。獨白と云うのは前に言つた咏嘆的のやうなものであり、複白と云ふのは甲語
り乙應ずると云ふ工合に、互に問答し應答して行く、通常の談話は即ち之に屬す

るのであります。是れも雄辯法として研究せなければならぬものであります。私がこゝに主として言はんとする處は、他人に對して自己の意志を告げんとし他は黙して之を聞いて居ると云ふ獨白の場合を指すのであります。この獨白の場合に亦二つあつて對者が一個人である折と公衆である折とであります。一個人である時と云ふのは、彼の平家物語に現はれて居る平重盛が父の清盛を諫めた言葉のやうなもので實に堂々たる一個の演説であります。唯一人たる清盛に對したもので、公衆に對したもので無い、我々がここに論ずるのは主として公衆に對する處の獨白であります。更に他の方法に依つてこの雄辯術を分類いたしますと單に自分の見た若くは聞いたことに就て、それと同じ觀念を聽者に抱かしむる目的を以て叙述するのがあります。之れをデスクリプション(Description)と言ひ旅行の報告などには必要な形式であります。併し我々がこの演壇に立つて話すのは單に自己の見聞を描寫して之を聽衆に示すと云ふ丈で無く、その事物の相互

的關係に付ての経路を今見るが如くに話して行くと云ふことの必要が有ります。さうすると是れは物語即ちネレーション(Narration)と申すものになります。俗間に行はるゝ講談のやうなものは此の中に屬せしむることが出来ます。即ち先きにいうた叙述の方では純客觀的であつて主觀の我と云ふものは加はらないのであります。この物語になると稍主觀が交つて來ることとなるのであります。それが一步進んで單にその見聞を語ると云ふのみでは無く、他の事柄と比較をして見たり、似たものを取つて、譬喩を用ひたりして我が了解したる處の意義内容を明確に他に傳へんとすることになりましたのをエキスポジション(Exposition)説明又は解釋と譯して通常所謂講話と云ふものは之に當ることになります。かうなると主觀が愈々明かになつて參りますが、更に一步進んで單に解らすと云ふ丈で無く更に自己の思ふ處を他をして信せしめんとし、之を理義に訴へ感情に訴へて語ると云ふことになると其れは全く主觀的のもので人に依つて異つて來ることに

なります。之をアーギュメンテーション(Argumentation)即ち辯論と申すので、私が主としてこゝに語らんとすものは、この辯論と云ふことに土臺を置いて如何にすれば自己が言語の力を以て他を説服することが出来るかといふ方法に就ての御話であります。

基礎學科

雄辯の目的が此の如きものでありますから、其の基礎學科となるべきものは實に多いのであります。先づ第一に雄辯は言語の力に依るものですから言語學の指示する所により正しき言語を使ふといふことが必要であります。正しき言語を使用しその語と語との關係を正しくして行かうとするに付ては、是非文法に依らんければならぬ、文法に背いた時には正しき國語と言ふことは出来ないでありますから之れを以て他に了解せしめんとするのは無理であります。只正しき言語正し

き文法と云ふのでは解らすことは出来やうけれ共、感せしむると云ふ力が無い。それには修辭學に依つて感銘深く趣味ある説述法を吟味しなければなりません。如何にすれば感せしむべきか、それには心理學の根柢に依つて人間の思想は如何に連絡して行くか、又言語が與へる處の觀念は如何なるものであるかといふことを先づ究めて行かんければならぬことになり、更に一歩進んで正しき言簡明なる口調といふものの外に我々は正しき思想を表白することが必要であります。それには論理學に依つて思想運用の法則を明かにしなければならぬ、さて又演壇に立つてはその對者の心理状態を観察せなければならぬ、それには群衆心理學と云うものに依らんければなりません、其の作業は一種の社會教育でありますから教育學の原理を看過することが出来ません。更に言語は口より出で、耳に入り聲に依つて傳へられ、その聲の抑揚、聲の調子、聲の高低等が感銘を與へるに多大なる影響あることを知らば音樂の原理に依る聲音學といふものも亦雄辯の基礎

學科をなすものであると言はんければなりません。此の如く算し來るならば一切の學問が集まつて以て雄辯の基礎學科をなして居るのであります。

藝術としての雄辯

雄辯は單なる學問としてでなく之を實際に應用して初めて力があるのであります。すから其の應用の上に於ては之を一種の藝術とも見ることが出來ます。その藝術と云ふ點から見ると又實に一切の藝術を含んで居るとも云へる、即ち耳に訴へる音樂、目に訴へる繪畫なごの様に演説は聲音を以て耳に訴へ而も實際聽衆の眼前に立つ態度を以て之を助けて行くのであるから、此の二つの方面から他を感發せしむると云ふことになるので、藝術として見ることが出來るのであります。

バックレーの雄辯法には「雄辯は藝術の最も偉大なるものにして、一切藝術の要素を含有し、且つ他の藝術よりも力強き感化を國民に與へて居る」というて居

ります、單に演説法と申しますが、其の關係する諸點を調べますと非常に廣汎なもので到底淺學な私の充分に御話することの出來るものではありませんが、此の問題に興味を持つて少しは調べて見た所がありますから、これらの學科を參考いたしまして引續き御話をしようと思ふのであります。

佛教には四無碍辯といふことがある。一は辭無碍で言語が自由自在でならねばならぬし
二は法無碍といふて所説の法即する説かんとち思想に就て適當なる言語を知らねばなら
ず三は義無碍といつて其の思想が充分に内に理解せられて居らねばならず、四は樂說無
碍とて聽者の耳に快く聞かしむるやうにせねばならぬ。

二 演説と言語

言語と觀念

私は前回に於て演説の三要素として理想と現實と調和といふことを申しました。更に此の事を正確に申しますれば演説は言語を以て辯士の理想を聴衆の現實に吹き込み、聴衆の觀念をして辯士の觀念に同化せしめんとするの働きでありますから、演説法研究の第一歩としては觀念の類化といふことを考へねばなりません。吾等の心が初めて新しい經驗に出會いたしませるときは必らず之れをもとから持つて居る舊觀念に類化せんとする傾向のあるものでありまして、決して舊來の觀念より全然孤立せしめて現に感覺したる事實を其儘に經驗するといふとは殆んどないものでありまして、吾等が新しき經驗に出會ひまして之れに一定の意義を有せしむるは全く之れを既存觀念に類化せしむることにあるので、戸外に轟々たる響を聞いて、其の電車の走るのを知るのは、曾て此の響きによりて電車の走るのを經驗したることにありますから、今又轟々たる響に接して其の曾て經驗したる觀念を呼び起して此の既存の觀念によつて現在の經驗を類化せしむるからであります。即ち此の既存觀念なるものは吾等が認識の能動的要素となり新經驗は其の所動的要素となるものでありまして、吾等の智識は實に此の二要素によつて其の内容を豊富にせられて居るのであります。さて此の新經驗の類化と申すことに二つの方向があります。即ち一つは新らしき經驗に出會したる場合出来るだけ之れを舊觀念の系統を傷けることなくして、其の中に取り入れんとするの傾向で、例へば兒童が初めて雪の降るのを見て、之れを既に知れる觀念の中に求めて白砂糖のやうであるとか、綿のやうであるといふのは之れであります。されば吾等が話を平易に理解せしめんとするには成るべく其の既存觀念を變化せしむること少くして新觀念を類化せしむるといふやうにせねばなりません。それは如

る響を聞いて、其の電車の走るのを知るのは、曾て此の響きによりて電車の走るのを經驗したることにありますから、今又轟々たる響に接して其の曾て經驗したる觀念を呼び起して此の既存の觀念によつて現在の經驗を類化せしむるからであります。即ち此の既存觀念なるものは吾等が認識の能動的要素となり新經驗は其の所動的要素となるものでありまして、吾等の智識は實に此の二要素によつて其の内容を豊富にせられて居るのであります。さて此の新經驗の類化と申すことに二つの方向があります。即ち一つは新らしき經驗に出會したる場合出来るだけ之れを舊觀念の系統を傷けることなくして、其の中に取り入れんとするの傾向で、例へば兒童が初めて雪の降るのを見て、之れを既に知れる觀念の中に求めて白砂糖のやうであるとか、綿のやうであるといふのは之れであります。されば吾等が話を平易に理解せしめんとするには成るべく其の既存觀念を變化せしむること少くして新觀念を類化せしむるといふやうにせねばなりません。それは如

何に舊來の觀念系統と衝突するものがありましたも、成るべく其の異なる中より
既存觀念と一致する所を求めて之れを同一列に置かんとする傾向は免るゝことの
出来ないものでありますから、聴衆の已に知つて居る事實に例を求むるといふこ
とは必要なことでもあります。若し海といふものも舟といふものも知らないもの
に對して海と舟との話をしようといたしますれば、彼等の既存觀念たる水溜りに
柳の葉の浮ぶことより漸次擴大して行くといふやうなことが此の觀念傾向を利用
したのであります。勿論吾等の觀念には今一つ新らしき經驗によつて舊觀念を變
改して行かうとする進歩的の傾向があるのですが、それも矢張他の既存觀念に基
いて其の舊觀念を打破して行かねばならぬのでありますから、全く經驗のないこ
とを吹き込むにも何等か彼等の既存觀念中に類似したるものを求むるといふこと
が必要であります。

言語は符號

心理學の教へまする如く、吾等が新經驗に接して其の思想内容を豊富にして行
きまするのは、先づ其の實物を感覺によつて直観したるに初り、其の實物去るの
後も、これを心に再現せしめて思ひ浮ぶることが出来るものであります。此の實
物去るの後も心に再現せしめて思ひ浮ぶるのは觀念又は表象と呼ぶるのであり
ます。即ち初めて犬なる實物を見て之れを心に取り入れ、犬去るも之れを思ひ浮
ぶるのですが、世の中に犬といふものを經驗することは出来ません、犬といふの
は總稱でありまして、實際は人に馴れ易く、ワン／＼と吠える猫でもなく狐でも
ない動物を經驗し或は其の色の白いのを見、之れと同じ動物で色の黒いのを見、
或はポインター種の見、ブルドック種の見、之れと比較して其の間に類似點
を認め、其の類似點のみを抽象して之れを概括して、こゝに犬といふ概念を作る

ので、つまり犬といふ名は此の概念の符號で、此概念を出發點として之を猫や狐と比較し又其類似點を抽象し概括して動物といふ概念の符號を作るので吾等の使用する言語は實は此概念の符號に過ぎないのであります。即ち吾等は此符號を透して自己の思想を他に傳へんとするのであります。こゝで少しく言語の事を御話申して置きませう。

言語の豊富

言語の成り立ちまする主觀的原因は今申しました通り、實物—感覺—直觀—再現(觀念)—比較—抽象—概括—概念—命名となつて參りますのでありますが、これは主として名詞に就て申したので、言語は勿論こればかりではございません吾等は心内に強い情緒が起りますと、自然に之を身振りとなつて他に發表するものであります。驚きの場合には驚きの表情、喜悅の場合には喜悅の表情となる

のですが、そればかりでなくそれと同時に其の感情を呼び起したる事物に關係しまして、或は之れを指し、或は眼を其の方に向けましますし、其の事の目前にない場合には手眞似や足眞似で之れを示すことになりまします、此の身振といふことは思想發表の簡單な形式で、言語(正しくはさう申されませんが)の尤も原始的なるものであります。これも最初はたゞ自己の情緒の表出に過ぎなかつたものであります。人は一人で居るのでなく、他の人と共存して居りますから此の單純なる身振も同種族の人には互に了解する事が出来るやうになりました。言語の働きをいたすのであります。曾て布哇の土人が米國の聾啞學校へ參りました時、其の云ふことは他の人には通せなかつたが啞生の手眞似は能く解することが出来たと申すことであります。併しこれは口から出て耳に入るものでありませんから正確に言語といふことは出来ませんが、其の口から出て耳に入る言語は何に基くかといふとこれにはいろいろの説がありました。或る學者は小兒が犬をワン／＼、猫をニヤン

といふやうに自然の聲を模倣したのが初りであると申しますし（これを模聲説 (Onomatopoeic theory) と申します）或る學者は「オ、」とか「あ、」とかいふ歎聲は萬國共通でそれこそ人類言語の始源であると申しますが（これを歎聲説 (Interjectional theory) といふ）それらのことは言語學の専攻に譲るといたしまして、こゝにはそれらの言語が觀念の働きと同じく似たものには似たやうな名をつけて、「眞似」るといふ語から「學ぶ」といふ語が出来、つめた（冷）爪痛いの義であるとか、英國の綠色をグリーン (Green) といふのと草木の成長するグラウ (Grow) と似通へるも皆なこれで、それが更に複雑になりますと、修辭學の方でいふ轉義 (Trope) となつて探偵を犬といふたり。決勝點を關ヶ原といふたりするとなつて、新しき觀念には新しい名をつけ、漸次に言語の數は増して今は日本語は「言海」なぞによりますと五萬の多きに達して居りまして、同じ事をいふにも種々な言語があります。私と申しますにも、

僕、吾輩、拙者、自分、手前、吾等、身共

なぞといふ言語があり、他人に對しましても、

君、あなた、貴殿、おまへ、汝、貴下、足下

なぞとあります。かく代名詞ばかりでなく、酒を一つ命するにいたしましたも、

「御酒を持つてきて下され」とも、「酒を持つて來い」とも、其の入れ物を直に酒の名として「徳利だ」と簡單に命することもあれば、「御銚子を御頼み申します」など叮嚀にもいひ又其の中の特殊のものを以て代表せしめて「正宗」をともしはれるのですから、言語の數を知つて其の中の尤も適當なるものを選ぶといふことが演説家に於て尤も必要なことであります、所詮演説は自己の言語を透して思想を發表するのですから言語が豊富なればなるだけ選擇が自由で最も正しく且つ確かに自己の思想を表はすことが出来るのであります。

言語選擇の三標準

さて其の言語を選ぶには如何なる標準によるかといへば、第一に純粹で、外國語や地方語を混らぬやうにするのです。無暗に外國語を混て得々たるものは、自己の其の國語の知識に乏しいのを示すと同様で、自國民に告ぐるの方法として純粹を缺くものでありますし、一地方のみに行はれて他の地方に行れない言語、例へば南部の片田舎で汝等といふことを「やれがんどう」というたり、九州の或地方で「ぬしら」といふやうなことを、其他、長崎の「バツテン」、薩摩の「ヨカ」、大阪の「サカイ」の如きは國語の純粹を缺くものでありますから、成る可く洗練せられた中央標準語によるといふことが必要であります。第二は正確で其の思想と言語とがピッタリと合ふて他の言語では代られぬと云ほどのものであれば充分ですし、よしそれほど巧に參らずとも文法によつて聽くものを誤らしめざるやうにいふこ

とか必要であります。それには成る可く意味の曖昧な語を用ひぬやうにすること例へば『三日』といふ語の如きは前か後か曖昧であります、かゝる弊を去り且つ語と語との關係を明にして明確に主客を知らしむるやうにせねばなりません「義經と辨慶とが共に戦ひまして」なぞいうのは義經と辨慶とが共に平家と戦ふたのか、義經と辨慶とが戦ふたのか不明瞭であります。それから第三には平易といふことです。即ち専門語を避けて一般的普遍的の言語を選ぶことです。兎角演説や講話を試みんとするものが此機會を利用して自己の學識を廣告しようとするものであるから専門語を振り廻はして得々たるのであります、之は決して演説や講話の目的を達することの出来るものではないので此の如きは聽衆の舊觀念に類化せしむることの出来ない言語を以て聽衆を苦むるに外ならぬのであります。これらのことは尙ほ後に御話いたしますが、こゝには此の純粹、正確、平易の三つが言語選擇の標準であるといふことだけを申して置きます。

三 演説と音聲

演説の巧拙

先きに言語は觀念の符號といひましたが、此の觀念の符號のみにては思想を完全に表示することの出来るものではありません。完全に思想を表示せんには此の觀念と密着せる感情の方面をも表示するものがなければなりません。感情の方面を表示するといふには唯だ言語を明確に發聲するだけで役に立つものではありません。同じ芝居の臺詞でも名優の口から出る時と鈍優の口から出る時とは感興が違ひ、同じ文句の淨瑠璃でも名人の語つた時と下手の語つた時とは聽衆の心を動かすに大變な相違があり、同じ草稿を持つての演説でも巧拙の差を生ずるのは言語に違ひがあるのではなく、其の言ひ廻しに違ひがあるのです。聲音によつて言

語を見ますれば、音別と音數と音次とは誰れがいふても同じことです。音別といふのはアとかイとかカとかキとかいふ音でエンゼツ（演説）といふ語は誰れが云ふても、エとンとゼとツとですし、「ハナ」と云うのは誰れが云うても、ハとナとの二音で音數に相違はなく、エンの次ぎにゼツ、ハの次ぎにナで音の次第も變るのではありませんが、それに巧拙の別があり、上手下手の差を生ずるのは、辯士其人の主觀的狀態に基づく音色や、音度や、音幅や、音長に由るのでこれが直に演説の巧拙とありますので其の事を追々と御話いたしますが、こゝには聲音自體に諸種の聯想が起つて感情を表示することだけを申すことにいたします。

音聲と聯想

言語は口から耳に入るものであるから聲音其者によつて聽衆に與へる影響に少なからぬ差を生ずるもので、單に「戸を叩く」といふより「戸をドン／＼と叩く」

といふ方が感銘を深くし、

雨が降り電が光り雷が鳴つた、

といふより

雨がザツト降り出して電光がピカリ雷がゴロ、

といふ方が興味を深くするのも此の聲音が手傳ふたのでありますし、單に、

概はしき次第であります、

といふより

慨嘆の至りに堪へないのであります。

といふ方が如何にも其の情を現はしたやうに聞ゆるのは其の音の響きが其の感情と一致するからであります、これらの事を御話するに就ては、先づ音書といふことを申さねばなりません。

音 書

音書即ちサウンド、ピクチャー (Sound picture) と申しますは、辯士の思想が裸體のまゝに現はれた言語の尤も原始的なもので、修辭學上に摸聲とか聲喩 (onomatopoeie) とか申すのは全く此の音書に屬するのであります。勿論思想が裸體のまゝに現はれるのは此の摸聲とか聲喩とか申すものばかりでなく、「オ、」とか「嗚呼、」とか申す感歎語もありますが、これは其数が少いし、且つは其の音によつて感情を聯想せしむるだけであります、音書の方は其の音によつて實狀を聯想せしむることも出来ますので、今日文章の形容詞となつて居りますものには此の音書の次第に美化せられ觀念化せられたものが多いので、歌人の、
まさあぐるしのすだれのさら、
思ひもかけぬ今朝の初雪

とある、さら／＼は「更に」といふやうな觀念が伴ふて居りますが、又籐を捲き上ぐる音と關聯して居るのでありますし、詩人の

無邊落木蕭々來

不盡長江滾々流

といふ「ショウ／＼」も「コン／＼」も共に此の音書より發達したので、更に實狀に近いのを挙げますと、俳諧師の

春の海ひのもすのたり／＼かな

ひよろ／＼と尙ほ露けしや女郎花

といひ、狂歌師の

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしては暮されもせず

皆な此音書が利用せられたのであります。

模聲と模形

此の音書は聲音に模するばかりではありません。如何にもそんな音がしさうなといふ想像より形を音に化して之れを摸するのがあります、先きにいふた雷のゴ／＼は確かに聲音に摸したのですが、電のピカリは音ではなく形であります。

「私の友人に非常に質の悪い人がありまして、私は其の人に會ふまい／＼と思つて居りましたのに或る時途でバツタリ出遇ひまして私はギョツとしました、スルト彼はシク／＼と泣く眞似をいたしました、どうか交際をつゞけてくれと申しましたが、私はキツバリ断りました。

此のバツタリも、ギョツトも、シク／＼も、キツバリも皆な形を音になほして摸したのでありますから摸聲でなく摸形であります、矢張音書の中に屬せしむることが出来ます。

音の性質

話説に聲音の利用せらるゝのは、こればかりでなく、言語の音其者を利用して其の特有の表情を以て聯想を豊かならしむることが出来ます。それは音其自身にいろ／＼な聯想がついて居りまして、大を現はす「オーキー」といふ音と、小を現はす「チヒサイ」といふ音とは趣きが異りまして、英語でもグレート(大)とティニー(小)とは音が其の形を現はして居るやうに聞かれますし、同じく英語でも烈しきものにはラ行の音が響いて、

ストロング(Strong) ストライキ(Strike) ストレンクス(Strength)

静なものには

スウイン(Swain) スウィープ(Sweep) スウイング(Swing)

スとかウとかの音が強く響いて居ります。日本語でもタ行カ行は男性的、ナ行は

女性的の聯想を起すことは何人も経験し得るのであります。一應諸家の説を參照しまして五十音に就ての性質を御話いたしませう。

母音、子音

何れの國でも言語には母音と子音との區別があります、母音と申すのは單純な喉音でいつまで長く引つ張つても變化せないもので、アでもイでもウでもエでもオでも變りませんがこれにク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ルの幽かな音を加へますと幽かなクとアとでカ、それがイに加はるとキ、それがエに加はるとケといふ風に子音を生ずるので、これは長く引つ張れば母音に返るので、カーア、キーイとなつて參ります。かく母音は變化しないものでありますから空虚とか永遠とか廣大とかを云ひ現はすには適當して居るので海洋といふより大海原といふ方が大きく聞え、空虚といふよりおほぞらといふ方が廣大に聞ゆるのも此の母音の利用

で、宇宙を形容してポウ〜(茫茫)といふのも、遠い所を形容してウンエン〜
ペヨウ(雲烟縹緲)といふのも此の音の力が與つて大なることを見ねばなりません。

齶音、舌音、唇音

子音の中にもいろいろありますが、先づカキクケコの五字は強く齶を動かして
出す音で、堅固とか鋭利とかいふ聯想を起さしむるもので、サムイサムイ(寒い
〜)といふよりカンブウリンレツ(寒風凜烈)といふ方が強く響くのはサの音
よりもカの音が鋭利なからで、此のサシスセソも同じく齶音ですが之は軽く齶を
動かすので清爽な思想が伴ひます、「ソヨ吹く風」といへば清爽ですが「カラツ風」
といへば鋭利です。「夕暮に眺め見渡すスミダ川」といへば清げですが「カツラ川」
ではどうも感興がうつりません。勿論「ヨド川」でも「キタカミ川」でも都合が悪い

これは矢張スの音が與つて方あるのであります。タチツテトとナニヌネノは共に
舌音ですが、タ行は強く、ナ行は弱いので、タ行は定着の意を示し、ナ行は婉曲
であります、ハヒフヘホは軽く飛ぶやうな音で笑ふ聲は皆な此の行で、これとマ
ミムメモは唇音ですが、ハ行の方は軽浮、マ行の方は柔軟で如何にも柔らかい、
ラリルレロは舌音ですが、これは巻き舌で活動とか勢力とかを聯想せしむるので
關東語と關西語と其の勢ひの違ふのはこれに由ることが多いので「あほうなお人
どすな」といふより「馬鹿野郎」といふ方に勢ひがあり、「何をおいひやすのや」
といふより「何だべらんめえ」といふ方が活動的なのもこれに由るのです。此の
ラの活動音を中心として、他の音を考へてごらん下さい。

カラ〜 サラ〜 タラ〜 ノラ〜
ヒラ〜 ムラ〜 ユラ〜
各々其の氣分が異りませう。これ全く音自身の性質によるのであります。ヤイユ

エヨと、ワキウエオとは喉音で半母音と稱せらるゝもので母音の性を持つて居りますが、ヤ行は柔かにワ行は大きい氣分を聯想させます。

濁音 其他

カ、サ、タ、ハの四行には濁音とてガギグゲゴ、ザジズゼゾ、ダヂヅデド、バビブベボの音があります。これは清音の意を一層強ういたしますので、

サンガクギガ (山嶽巍峩)

の如きは此の濁音によつて一層堅固となり銳利となります、時雨なれば「サツト降る」でよいが、夕立となると濁音を用ひて「ザツト降る」と云はねばならぬし戸を静かに叩くのならば「トン〜」ですが激しく打つならば「ドン〜」花が散るならば清音で「ハラ〜」石を抛るならば濁音で「バラ〜」若し「霰が降る」ならば、半濁音を用ひて「バラ〜」といふ即ちバビブベボは清濁の中間に位

する音を表はすのに適して居ります。

其他拗音というて或る音に、ワ、ヤ、ユ、ヨの音を加へたのや、撥音といふてンの音を加へたのや促音といふてツを加へたのがありまして、大體に於て語勢を強める力を持つて居ります、彼の

「一上一下虚々(拗音)實々(促音)鎗をけづつて(促音)相争ひ、断々(撥音)乎とし相譲らぬ」

などは此の音の利用で「なぐる」といふより「ぶんなぐる」とか「ぶつた〜く」といふ方が勢ひのあるのも此の力でありませう。

語 勢

これらは忙しいこと勢ひのあることをいふのですが、悠長なことをいふのには別に長呼音といふのがあります。

櫻の花がヒラ／＼ヒラ

というのは悠長な所がありませんが、

春の夕に庭に立つて居りますれば櫻の花がヒラヒラ

といふ方が靜かに聞ゆるのは此の語勢をゆるく長くするからであります、即ち語勢的には悠長な所は長く、忙しい時には短くするので、長くするには長呼音が利用せられ、短くするのには促音撥音等が用ひらるゝのですが、聲音の上から申しますれば、音長 (Length) といふことが考へられねばなりません、音長と申すのは同一音の繼續する時間の長短で、工場の汽笛のブーワーといふのは長いのですが、拍子木のカチ／＼は短い方「悠々として」は長い方「齷齪として」は短い方に屬するのであります。此の音の長短を利用して感興を興へるといふことは演説家の忘れてはならぬことで、これにはしばしば「疊音」といふことが應用せられもす疊音といふのは同一音を重ねて其の意味を強くするので、上來しばしば引用しま

したハラ／＼とかヒラ／＼とか蕭々とか滾々とか茫々とか申すのは皆な此の疊音です。

夕風のソヨ／＼と吹く荒れ野原を私はブラリ／＼と歩いて居りますと、雨がポツリ／＼と落ちて参りました。

といふのは叙景として疊音を用ひたのですが、

私は其の批政を論じて侃々諤々少しも屈せませなんだ反對黨は之れに對して讓歩を申し込みましたが、私は斷々乎として之れを却けました、事茲に至る今更ら何の讓歩です、起て諸君、起て諸君、起て、起て、起て、諸君起たすんば蒼生を奈何せん。

との演説にも多くの疊音が利用せられて居るのであります。私はこれらのことを御話いたすに就て更に音調といふことを申さねばなりません。

音 調

音調をよくするといふことは演説講話上に大事なことであるが、音調をよくするには第一對句を用ふるといふことが必要であります。柳は綠花は紅とか山高く水長しとかいふ類で或は「春の雨、目にはさだかに見えませんが道行く人の衣を濡し、秋の風耳にはさだかに聞えませんが窓を開けば落葉堆くなりて居るやうに、社會上の悪感化も知らず／＼人の心に浸染するものであります」といふ如く對句を用ひますれば音調が美しく整へられ話が流暢になります。尙ほ此の事に就いては後の組立法の條下に於いて説くことゝ致します。

此對句は語勢の上でいふことでありますが、今一つ此に全く形式的に音調をよくする法があります。それは五七または七五の調で即ち律格のものであります。此の形式は元と情の激したる場合に自然に備はる形式で、所謂自然の聲たる詩に

近いものであります。故に強ひて律格を作らうとして形式に拘泥し不自然に流れるのは演説講話の上に甚だ面白くないことであります。詩は情の最も美しい表現で、詩に近い格調を用ふる演説講話は矢張り一の詩であり、一の藝術であると云ふことが出来ます。トルストイは其の藝術論の中に、

藝術とは吾人が曾て一たび経験したる或る感情を先づ自ら内に再現せしめて之れを運動とか色彩とか音聲とか言語とかの媒介物に依つて他人に移し、他人をして自分と同一の感情を惹き起さしむる活動である。

と云つて居りますが、講話演説の感情的方面も此藝術的部類に属するもので、藝術論にいふ美の制約たる統一、變化、調和の三大要素は講話に於ける音聲の上にも亦従はねばならぬ根本法則であります。

四 演説と修詞

修詞の原理

始めにも申した通り、演説講話は、他の觀念を自己の觀念に類化せしむるまで力つよくあらねばならぬもので、それには是非共觀念聯合の法則から出發して言語を整へねばなりません。

觀念聯合とは、意識中の觀念が或る事件に因縁して舊觀念中之れに關係するものを意識面に喚び起す心的作用であります。之れに就いてアリストートルは、類似と對比と接近と繼續の四則を擧げて觀念の聯合を説明して居ります。或は繽紛たる落花を雪と見立て、或は染め成す紅葉の色を錦と眺めるなど、一の物から他の似たものを思ひ浮べる人間の心の働きそれが所謂類似の聯想であります。又、黒といへば白、善といへば惡、大といへば小、曲といへば直といふ風に反對のも

のを想ひ浮べる心の作用は所謂反對聯想であります。それから、學校といへば教師、お宮といへば華表、交番といへば巡查といふ如く場所の接近から此れより彼れを想ひ出す作用が所謂接近聯想、また犯罪と懲役、努力と成功といふ如く原因から結果に及び事件の繼續上に想ひ出す作用が所謂繼續聯想であります。斯く四通りに分類はするものゝ、もとく一の心の作用で科學的に嚴密なる區分は出来るものでありませんラッドは此の心の作用をば接近律の中に一切纏めて説き、ヘンディングは類似律を以て一切の本として述べて居ります、私は今此に心理の根本を説明しやうとするのでなく、修詞法を説く便宜上此の作用を持ち出したに過ぎないので、矢張りアリストテレスの四律によりて話すことが都合がよいと考へます。先づ第一に

類似的修詞法

即ち事物の性質、形状、關係等の類似せるものが互に聯合し、其の一を思ひ出す時は他の物をもそれから従つて思ひ起させる心の作用によつて言語を修飾する法を類似的修詞法といふのであります。吾々は話をする上に此の修詞法を用ひなかつたならば、抽象的觀念を表示するといふことが困難であります。例へば、『心』といふものを説明するのに千言萬語を費すとも十分に概念を示すことは六かしいのであります。

わが心池水にこそ似たりけれ

濁りすむこと定めなければ

と一首の歌を以てすれば念起念滅變化して止まざる心の性質がほど了解が出来ます。凡て抽象的觀念を具體的事實の如く言ひ表はすのはみな此の類似的修詞法に

よるものであります『諸行無常』の語を十分に説明するのは頗る困難であります。が縷々千萬語を費す代りに、

咲く花も散ることあり、盛てる月も虧けることがあります。

といへば此の花とか月とかの具體的事實によつて簡明にしかも面白く無常變化の様子が表はれます。抽象的觀念を抽象的にそのまゝ言つたのでは人は動かされるものではありません、これを具體的に表はして始めて力強い響きが傳はり感銘せしめ得るので、此は全く人の心の類似聯想の作用に訴へたものであります。

譬喩事例

演説家は好んで譬喩事例を常用しますが、譬喩事例は皆な此の類似聯想の修詞法に出立して居るものであります。スコットは、

「他の人々は譬喩を單に抽象的に表現して眞實を語らんとするも、雄辯家は

之れを尤も有効に啓示し得る具體的の形式による」

と申して居りますが、具體的の形式とは即ち譬喩事例を巧みに應用することであり、實際吾々の心を動かすものは抽象的のものでなくて常に具體的のものであります。如何に力あるものでも單に抽象的概念では人に感動を與ふことは困難であります。例へば千萬人が塵殺された大慘劇を語るも、たゞ殺されたことを抽象的に語るだけでは能く其の慘狀を想はせることが出来ません、然るに唯一人が殺された事實でも其の悲痛の叫び、其の呻き苦む狀、其の流るゝ血、など詳しく語るならば聞く人をして慘狀を髣髴せしめ、深く感動せしめ得るでありませう是れは即ち具體的に示すからであります。故に抽象的觀念を具體的に類似を求めて話す所の譬喩は演説の上に尤も大切なるもので、彼のクリストの四福音書や論語や佛書などが吾々に深き感銘を與へるのも、實に到る處多くの譬喩を以て啓示されてあるが爲めであります。

譬喩を用ふるときは、趣味なきものも趣味あらしめ、解し難きものも解し易からしめ得るといふ二の大なる利益があります、例へば「人生」といふ如き抽象的概念的のものを説明するに當つて「人の世の中は互に持ちつ持たれつで丁度老人の杖の如きものである。老人は杖によつて立ち杖は老人の手によつて立つ、若し互に相倚らねば双方共に倒れねばならぬ」といふ風に一の譬を以て示すならば何人も解り易からしめることが出来る。斯ういふやうに何事も手近い處へ持つて來て話しをするのが尤も効力があるものです、哲學上の厭世論樂天論の説明をするにしても、小六ケしい術語などを列べては容易に理解せしめ難いが、

「人々の中には渡る世間に鬼はなしと見る人もあり人と見たら泥棒と思へといふやうに考へる人もある」

といへば話しが解り易くなります。是くの如きは皆な類似律に基き、抽象的のものを具體的に表示する譬喩事例の應用に外ならぬのであります。

譬喩利用の心得

譬喩應用の利益は實に大なるものでありますが、此の譬喩利用に就いて心得て置かねばならぬことがあります。

○第一に、譬喩はあまり陳腐なものは不可ない。譬喩は前にも云へる如く、話を理解し易からしめ且つ趣味あらしめる爲めに用ふるものであるから、あまり陳腐なものをも以て「何だまた彼の話か」と聴衆に思しめるやうでは却つて著しく話の趣味を減殺する事になつて折角利用せんとする譬喩の効力はないものとなります。

第二には感情の激して居る場合に譬喩を用ひてはならないことでもあります。例へば非常に悲しい場合に喩は「非常に悲しいです、喩へば……」など言つたのでは一向悲しみの情がうつりません、元來譬喩は類似を求めて出来るもので、類似は即ち彼れと是れとの比較であるから、少くとも精神平安で彼是比べて考へ得る

だけの餘裕がなければならぬ、所が感情の激して居る場合には何人も此の餘裕を失つて居るものである、其處へ「譬へば……」など呑氣なことを言つては寧ろ滑稽であります。また外にも注意すべき心得はありますが、此の二つは譬喩利用上に最も知つて居らねばならぬ大切なことでもあります。

寓 喩

譬喩の變形とも見るべきものに寓喩(Allegory)といふがあります。是れは實義を隠して全く譬へにして話すので、聞く者をして其の譬への奥に潜める實義を思ひ起させようとするのであります。「猿も木から落ちる」と言へば、猿が木から落ちるといふ事實を語るのが目的でなくて、猿は木登りが上手であるがそれでも落ちることがある如何に上手な人でも過ちはあるものだとの戒めが本義であります。此の抽象的な義を隠して、猿も木から落ちるといふ具體的事實を現はす、斯うい

ふのが寓喩であります「燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らん」なども同じ例で、小人を燕雀に、大丈夫を鴻鵠に譬へて言つたのであります。

此の寓喩を更に長くしたのが寓話で、お伽噺などがそれであり、彼の兎と龜の噺の如き全く假作でありりますが、其の裏面には「油斷大敵」といふ教訓を用してあります。此の抽象的の教訓を具體的事實として説明する所に、寓喩の用はあります。而して此の寓話に二様ありまして、即ち實際有り得べからざる事を假作するものと實際有り得べき事を假作するものとであります。前者は兎と龜の噺の如きがそれで、後者に屬するものとしては徒然草にある法師の話の如きがそれであり、

或るもの、子を法師となして、學問して因果の理を知り説經などして世わたる便ともせよといひければ、教のまゝに、説經師にならんために、まづ馬に乗り習ひけり與車もたぬ身の、導師に請せられん時、馬など迎へにおこせた

らんに、桃尻にて落ちなんは心憂かるべかしと思ひけり。次は佛事の後酒などすゝむることあらんに、法師の無下になきは檀那すさまじく思ふべしとて早歌といふことを習ひけり。二つのわざやうく境に入りければ、いよくよくしたくおぼえて嗜みけるほどに、説經習ふべき隙なくて年よりにけり。これらは實際有り得べきことを假作し、此の寓話の中に、人は本末を誤つてはならぬ、といふ訓誡を含めたものであります。

要するに寓喩の利用に就いて、(一)説話をして興味深からしめる(二)聽衆をして判知し易からしめるの必要で、話は面白かつたが何の意味を言つたものか判からぬ、といふやうであつては何の効力もない、(三)本義譬喩共に價值あるものでなくてはならぬ。この三要件は寓喩利用上に忘れてはならぬ注意であります。

以上類似聯想に基いて行はれた修詞法の譬喩に就て述べたのでありますが、總て思考の上に二物の類似點を見出し一方より他方を想ひ浮べる心理作用の利用で

あります。之れがもつと情念が激した場合になると、其の類似點を一層誇張して感じを深からしめる修詞法を用ふることがある。其は次の想化法であります。

想化法

想化法の中には先づ張喩(Hyperbole)が説かれます。

頭が割れるやうに痛い。

寒風膚を劈く。

如何に頭痛がしたとて頭が割れるやうなことはない、寒風如何に鋭いとはいへ膚は劈かれはせぬ。實際有り得べからざる事であるが、之れを有り得べきことのやうに思はせる言ひ方をする、これが張喩。即ち誇張して言ふ譬であります、人の情が事物を反映するとき實際よりは多少割増も割引もあるものである。此の心理作用を利用したのが、即ち此の法で此の法を用ふるに當つて、眞に辯士の衷心か

ら逆ると聽者に深刻な感動を與へるものであります。然し其が若しワザトらしい言ひ方であつては管に感動を與へぬのみか、寧ろ滑稽で講話の價値を甚だしく減するものであるから、最も情の自然に出でたものでなければなりません。故に此の法は、謹嚴、精密の話をする場合に用ひてはならぬと心得べきであります。

想化法には今一つ擬人法(Personification)といふがあります。之れも情念の高まつた場合に自然に用ひられるもので、非情の物をも吾と同じ有情の如く取扱ひ死物を生物の如く想化せしめる言ひ方で、之れを又活喩といふのであります、子供達か、

お月さんいくつ十三七ツ。

といふのは月を人間の如く想化したもの、或は、「花笑ひ鳥歌ふ」「狂瀾怒濤」などの笑ひ、歌ふ、狂、怒などの文字はみな人間の如く想化して表はされたもので、

ゆさくと春がゆくぞよ野邊の草、

なども同じく擬人法を用いたものであります。此の法を用ふるに當つてワザとらしいのは不可ない、極て自然に出たのでなくては效力がありません。

此の活喩の反對に生物を死物の如く換へて譬へる場合があります、活喩に對して之れを死喩とも言ふことが出来ます。

彼奴は金庫の番人だ。

彼れは字引の化物だ。

などいふのは此の死喩の例であります、また情念が非常に高まつて、理想と現實の見界なきまでに至つた場合に出る法に頓呼(Apostrophe)といふがあります。之れは現に無いものを有るが如く、生なきものを生ある如く言ひなし、

おゝ花よ汝!

夜は更けたり、我心澄めり、あゝ月よ。

といふが如く、尋常の語法で話す中に急に一頓した語を挾む法で、

南無三寶秋は來にけり花に風。

露のひぬ間の朝顔を照らす日の影こそつれなけれ、あはれ一村雨のふれかし南無三寶、あはれは、此中の頓呼法であります。之れと同じ想化法で、過去を現在の如く、また將來を現在の如く、想像を實際の如く言ひなす法が用ひられます先に講話の分類の上で言つた叙述(Description)や物語(Narration)は多く過去を現在の如く寫して動詞や副詞を全く現在格に用ひて居ります。

三月、越、吳を伐つ。

伐つは現在動詞で、現在動詞を以て過去を寫した例であります。また

地震がグラ〜と來て親も子も壓し潰さる。

之れも同じく過去の事實を語るもので、過去動詞ならば「壓し潰されたり」と言はねばならぬ所を現在動詞を以て寫し出して居るのであります。之れと同様に將來の事も現在にうつされます。

獨逸大に露西亞を破る、忽ち滿蒙を略し、更に手を日本に伸ぶ。

といふ如き、之れは全く『かも知れぬ』といふ假想でありますが、之れを現在の如く言ひなされるのであります之れも矢張り前の諸種の譬喩と同じく極めて自然に出たのでなくては説話の上に害になるとも決して利益はありません。之れが用ひ方によりては飛んだ誤解を起させる場合がないとも言へぬから随分注意を要します。以上で類似聯想に基く修詞法は一段落として次の反對聯想に移りませう

反 對 聯 想

反對せる觀念は、互に他を再現せしむる傾向を有するに基くもので、先にも言へる如く、上といへば下、白といへば黒といふやうに、白中に黒、或は黒中に白と、彼此交互して説話に着色を與ふものであります。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山さくらかな

提灯と鐘。雲泥萬里。

などの類で、此は或る主想を明瞭ならしめんが爲め、また二物を對照せしめんが爲めに用ひられるものであります。

東洋では早馬早昇を用ひてゐました、西洋では汽車電車を發明しました。

昔は人から金を借りて其の證文に『若し期限までに返済出來ざる時は人前にて御笑ひ下され度候』と書いた、今日では何と書くか『若し返済出來ざる時は裁判所へ御訴へ下され度候』とせねばならぬ、

といふ如き、みな反對のものを比較對照して面白味をつけるので、反對聯想の心理作用に基いたものであります。

此に一言を要することは、この對比に用ふるものは、元來全然異別なるものゝ如く思ひなされるが、實に全然異別なる二物ならば類似の物とも又反對のものゝ

も言ふことの出来ません。例へば、

机と晴天、白と三角。

などは全然異別なもので比較にも対照にもならぬものであります。然るに

善と悪。黒と白。

といへば反対のものであると言ふことが出来比較対照せしめることが出来る。即ち善と悪とは同じく行爲の評價で二者は類似のものがあるからであります。即ち此に言ふ反対といふ意味は、類似中の反対で、類似を別にして反対を語ることは出来ないものであると知るべきであります。

此の反対聯想に基いて演説家が好んで用ふる法は反語 (Irony) といふがあります。禪語に「眼東南に在つて意は西北に在り」と言つた調子で、口と心とが表裏して居るので、口では其の言はんとする真意の反対を言ひ、聽者をして聯想せしめて其の真意を悟らしめようとする法であります。

世の中に人の來る程うるさきはなし

とはいふものゝお前ではなし

お前ではなし、と口では言ふものゝ實はお前もうるさいといふ意味が皮肉に表はされて居ます。

誰彼れは斯くくの行爲を爲した立派な紳士である。

と、人の悪徳を散々數へ立てた後で、紳士であるといふ、卑劣漢とか悖德漢とかいふ代りに紳士の語を用ひたのは心と反対の言ひ方で斯ういふ言ひ方が即ち反語法であります。此の反語法は人の肺腑を抉ぐるやうな強い力を有するもので、最も人を感動せしめるのであります。之れも拙劣に用ひると却つて非常な誤解を與へたり、聽者の悪感を惹いたりして講話演説の目的を達することが出来なくなるやうなことになるから、餘程注意を要します。尙ほ此の法に就いては、詳しくは後の機會に譲るとして次には接近聯想をお話することにします。

接 近 聯 想

吾々の心の中には、空間上に於いて様々に經驗された物が、様々な型式に於て藏はれてあるが、それが互に接近した物に對する觀念を相互に復歸せしむる傾向に本づいて働く心の作用を接近聯想といふのであります。例へば、筆といへば紙又は墨、硯などが直ちに想ひ浮べられ、或は寺院といへば坊さん若くは佛像、墓地等が想ひ出され、氷囊を見ては禿頭を想ひ出し、花と聞けば吉野山を想ひ、紅葉と聞けば立田を考へる、之れらは皆所謂接近聯想の中であり、此の接近聯想の中には種々の區別が立てられます。

提 喻

第一には分と全、即ち部分と全體との關係であります。例へば

今日の宗教界一人のルーテル無し

といへば、ルーテルといふ一宗教改革者を以て宗教改革者なる全稱に代へたものであります。

彼女は實に現代の紫式部である。

といへば紫式部なる特稱を以て女流作家なる全稱に代へられる、其他「小野の小町か照手の姫か」とか「毛嬙西施か楊貴妃か」と云つて美人の代名詞の如く用ふるのも此の例であります。

第二には其反對に、全と分、即ち全體と部分との關係で、

今日の宗教界に人なし

といふのは人が無いのでない。立派な人が無いとの意で即ち全稱を以て特稱に代へたものであります。有名な韓退之の

伯樂一たひ冀北の野を過ぎて馬群遂に空し、……空しとは馬無きに非ざるな

り良馬なきなり。

の如きが之れが適例であります。

これは／＼とばかり花の吉野山。

花の吉野、其の花は外の花ではない言ふまでもなく櫻の花で、之れも即ち花といふ全を以て櫻といふ分を表はした修詞法であります。

斯様に或は特稱を以て全稱に代へ、或は全稱を以て特稱に代へるのは所謂接近聯想の應用で、之れを提喻(Synecdoche)と名けます。何故なれば、先づ主要なる部分を提げて他を聯想させる所の修詞法であるからであります。

換 喻

提喻は主として分量に就いての言ひ方でありますが之れに對して別に事物其物の關係上に接近を認めて、語の修飾をなす法がある、それを換喻(Metonymy)と

名けます。之れは或る特有のものを舉げて以て其物を代表せしめるので、例へば單に記號を言つて實物に換へる如き類で、大學生といはずして角帽といひ、女といはずして島田といひ、美人といはずして細腰といふ、之れらは皆其の記號を以て實物を代表するに足るもので、何人もそれによつてそれ／＼の實物を聯想することが出來ます。併し其は記號でさへあればよいといふわけにはゆかぬ。同じ記號でも角帽といはずして若し正服と言つた場合には、必ずしも直ちに大學生が想ひ出せない、それは學生であるのか、軍人であるのか、又巡査であるのか不たしかである、故に記號を以て其物を表はさんとするには、其記號が直に實物を代表して何人にも想ひ出させるに足るものでなくてはならぬことを忘れてはならぬのであります。

以上の例は、空間上に於ける接近に基いた修詞法でありますが、更に時間的の接近聯想も説かれるので、アリストテレスが所謂繼續聯想、即ち因果の關係に本

づいて語を修飾する法であります。勿論絶対に空間に關係なき時間はなく、時間と何等交渉なき空間は考へ得られないが、時間空間共に吾々の意識中に藏められそれが或る原因から結果に至る繼續的關係に於いて或る接近を認める感念を時間的接近聯想を謂ふことが出来ます。例へば「四大不調」といへば直ちに病氣といふ意味に考へられる、之れは四大不調の原因から病氣といふ結果を聯想せしめる修詞法であります。

明日の煙も立ち兼ねる。

といふかき 此の例で、煙の立ち兼ねるといふ原因を擧げて飯が食へぬといふ結果に代へた語の修飾に外ならぬのであります。

尙ほ此の換喩の法に、單に原料を擧げて其物を代表せしめるといふのもあります。

身に寸鐵を帯びず。

といふ時は寸鐵なる原料は直ちに刀劍其物に代へ用ひられたる言葉となり。

あの人はおかいこぐるみで居る。

といへば、蠶の原料を以て絹物の語に代へられたわけであります。此等の事は修辭學上の問題に屬するのでこゝには詳しく解説するの要はありません、接近聯想の應用には斯うした修詞法もあるといふことを承知されればよいのであります。

修詞のことは修辭學の領域に屬するので、已に他の著書にも説いたのですが、一應これを申して置きますと演説法を完備することが出来ませんから、重複を厭はず、之れを示したのです。

五 演説の材料

構 想

雄辯は人格の發露、演説は自己の思想を他に傳へるのであります。よしそれが他人の思想であつても、それを充分に咀嚼した自己のものとしてしまつて初めて他に發表することが出来るので、其の材料は他人のものであつて、それを本として自己のものとして組立てねばなりません、此の點からいへば雄辯は一種の創造で、一場の演説を組み立てるのは全く自己の力に頼らねばなりません。此の自己の主観によつて考へを立て、行くことを構想といひます。此の構想によつて一篇の大主意を定め、自己の云はんとする所と、聴衆の現状とを視察し、如何にすれば自己の云はんとする所を聴衆に徹底せしめ、如何にして聴衆をして自己の云ふ所を首肯せしむるかを考へねばなりません。此の考へのない出鱈目演説は、よし

一時の興を買つても、演説の本領ではありません。

構 想 の 要 點

構想の要點は前にもいひました通り理想と現實との調和で、それには第一に思想の充實、第二に現實の視察、第三に演述の順序方法といふ三點に注意せねばなりません、思想が充實して居らねば云ふことに缺陷が生ずるし、現實を観察せなければ折角の議論も聴衆とは没交渉となつて其の耳には入らぬし、演述の方法や順序が悪ければ聴衆をして首肯せしむることは出来ないから此の三點は演説構想の上に尤も必要な注意であります。此の三點によつて新らしきものを造り出して初めて自己の演説といふものが成立するので、何等自己の考慮を運さざるもの即ち此の構想のないものは、如何に聲を大にし語を美にするとともに到底人を動かすの雄辯とはなり得ないものであります。

話材の蒐集

此の三點に注意して想を構へるのは一つの家を建てるやうなもので、大體の規模は定つて、さて其の上に必要なのは材料の蒐集である。材料の善悪は直ちに其の家の價値に關する如く、演説の價値も亦其の材料の如何によつて判定せらるゝものであるから大體の主意が定つた上は、此の主意を中心として材料を蒐集せねばならぬ。さて如何なるものが話材となるかといふに、使用の目的によつてさまざまの區別はあるが、先づ第一に、

格言

古聖先賢の云ひ遺されし金言に千古の眞理を含むで居るものが多いから之れを使用して自己の所説に權威あらしむるといふことが必要である。先づ萬人の欽仰

する古聖先賢の格言を擧げてこれを敷衍して自己の所説に入る演説的の組立にも先づ自己の所説を述べて之れと相似たる金言を引用して所説の誤らざるを確むる歸納的の組立にも、金言は其の名の如く演説に千金の重みを爲す所以である。此の格言の選擇に就て、

- a 著名なる人の言なるを要す。
- b 簡にして明なるを貴ぶ。

既に自己の所説に權威あらしめんとしての材料に供するのであるから其の人は萬人の欽仰するものでなければならぬのは云ふまでもない。若し其の人が何んな人やら判明しないやうでは其の目的を達することが出来ないものであるから、若し聴衆の多くが其の人を知らずと思考したれば、先づ其の人の地位を明にして、これは近代有名なる哲學者で歐洲の思想界の泰斗と云はるゝ人であるとか、此の問題に就ては此の人以上の精通者はないと云はれて居る人であるとか一應の説明を必要

とするのであります。併し此の説明を多く要する人は、格言引用の効果は薄いのであるから、成るべく著名な人を選ぶといふのが格言引用の一要件である。其の簡にして明なるを貴ぶといふたのはもとく自己の所説に權威あらしむるために引用するのであるから長くて解し難ければ、それに説明が要つて自己の所説を用したる格言とは殆んど同價值に止まつて何の權威も附することが出来なくなるものであります。さて話材の第二は、

和歌俳句

の如き文藝上、壓搾せられたる作品で、これは短い句の中に多くの意義が含ませて言辭をして趣味深からしめてあるから自己の所説に趣味あらしむるには尤も必要なる話材である。月を見て喜ぶものもあれば悲むものもあるといふより、或る人は、

此の世をば我が世とぞ思ふ望月の

かけたることもなしと思へば

といふかと思へば、又或る人は

月みれば千々にものこそ悲しけれ

我が身一つの秋にはあらねど

といふものもあるといふ方が趣味深く、其の悲喜を超越し居るものがあるといふ

よりは

雲にたゞ今宵の月をまかせてん

いとふとしても晴れぬものゆる

と詠じたものもあるといふ方がよいし、如何に世の中を達観しても働かねば食へ

ぬといふよりも

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしては暮されもせず

といふ方が面白い。寒い／＼というたとて仕方がないといふより「炬燵には矢張炬燵の寒さかな」ちやと俳句を引用した方が趣味が深いといふのは皆な此の文藝上の作品の力であります。漢詩も亦此目的に於て使用せられ單に支那人は物を大げさにいふ風があるといふより「白髮三千丈、愁に縁て箇の如く長し」といふ方がよいやうなものであります。併し漢詩は難解のものが多くて、和歌や俳句のやうに我が國民に親しくないから、此の目的に於て使用せらるゝは、主として和歌俳句で、これを選択するには、

a 難解なるものを避け、

b 趣味なきを去れ。

といふ二要件を必要とするのであります。

數の提示

自己の所説に興味あらしむるには和歌俳句を引用するのが有功ですが自己の所説の明確なることを示すには是非數を提示せねばなりません。即ち漠然と大きいとか、小さいとか、多いとか少いとか云ふよりも、其の長さは何千尺、其の小ささは何インチと數を提示すると其の觀念が明瞭に聽衆の心に入ることが出来ます。一體人間は抽象的なものよりも具體的なものに明瞭なる觀念を喚び起すものであつて漠然たる大小の如き形容詞よりも、確かな數字によつてハッキリと心に入るのでありますから演説の材料として缺くべからざるものは統計で、此の統計の使用に巧みなものは、それだけ自己の所説を信用あらしむることが出来るのであります。併し何が無趣味ちやというて統計ほど無趣味なものはなく、何が面白くないと云うて數字ほど面白くないものはないのですから此統計を用ふるには、巧みに

修辭法を利用して、或は多少を比較し、若くは小より漸次に大に及ぼして其比較や
對照の上に趣味を感せしむる様にせねばなりません。日本の財産を一人當にする
と非常に少いというのでは漠然として居るが、一人當百二十三圓であると云へば
明瞭になるが、まだ多いか少いかの觀念を充分ならしむることが出来ない。ソコ
デ日本人は百二十三圓、英國人は一千十三圓、ザット十倍ほど違ふと云へば、我
が財産の一人當の少いことが明確になる如き即ち比較對照の功でこれらの方法を
巧みに用ひて無趣味なる數字を面白く聴かしむることが出来れば演説も一人前で
あります。若し其れ此の統計を擧ぐるに譬喩を以てし、地球と月との差は何哩と
數を擧げると共にこれを一時間二十哩の汽車で行とすれば五百日ほどかゝる、こ
の勘定で太陽まで行くと四百年ほどかゝると云ひ、又は「小積つて大となるとい
ふこと」を示すのに、單にかく云はずして之れを具體化して「小積つて大となる
といふ證據には、東京人は毎日一間位の材木を八百三十三本食つて居る道理であ

る」と云へば何事を語るかと驚異の念を抱く、それを説明して、

東京では習慣として毎朝味噌汁を食ふ、味噌汁を食ふのには味噌を摺るために
摺木がある。其の摺木が一度に一分づつへるとすると、十軒の家では一寸、百
軒の家では一尺減るわけだ、十軒では十尺、萬軒では百尺、十萬軒では千尺、
東京は五十萬戸であるから五千尺の摺木は毎日食はれてしまふ道理だ、此五千
尺を間に直すと八百三十三間餘、町に直すと十三町餘となる。

と話す面白く聴かすことが出来るのはこれであり、即ち無趣味なる數字も
譬喩の利用によつて趣味あらしむることが出来るので、話材として尤も必要な
は此の譬喩であります。

話材としての譬喩

譬喩は先きにもいふ如く、

一、話説に興味あらしむる事。

二、解説を便ならしむる事。

の二つの利益があるので、之れを話材として利用するには三種に區別することが出来ます、(一)は解説の爲めの譬喩で、人生は例へば老人のつく杖の如しで、老人は杖を力にして立ち、杖は老人を力にして立ち持ちつ持たれつして居るのであるといひ又は天地は同根萬物は一體なり、といふ事を解説して、

此の茶碗と私とは其の本は一つで此の茶碗は何で造つてあるかと云へば土、私は何を食つて生きて居るかといへば米、米は何によつて養はるかといへば土であるから、米は土の子、私は土の孫に當る、今でこそ人間となり、茶碗となつて異つて居るが、其本は天地同根萬物一體、私と茶碗とは從兄弟同志位なものである。

といふ如きで、(二)は證明の爲めの譬喩、これは彼の印度の論理たる因明には三

支作法というて、

宗 何某は死すべし。

因 生あるが故に。

喩 凡そ生ある者は死す、喩へば犬猫の如し。

と初めに斷案を擧げ、次ぎに其の理由を示し、最後に例を擧げるの類で、これに同喩と異喩との二がある、同喩と云ふのは、自己の所説と同一の譬喩で「生あるものは死す、犬猫の如し」の如きであるが、其の反對に生なきものゝ死せざるをいうて「土石の如し」と擧ぐるのは異喩であります。

驕るものは久しからず、二十年榮華の夢に誇つたる平家の如き一時は咲き匂ふ花の如くに盛んであつたが、終に南海の春吹く風と散つたではないか。

といふを同喩といたしますれば

寡欲を旨とし質素を主義とした北條氏は九代の太平を保ち「身のほどを知れ」

の七字、「上を見な」の五文字を金科玉條とした徳川は三百年の太平を保つた。の如きは異喩であります。これらは共に所説を證明するの譬喩で、此外に趣味を目的とするために引用する場合もある、かゝる場合には譬喩といふより寧ろ挿話といふ方が適當であります。

挿話

挿話もこれが話材として用ゐらるゝ時には譬喩と同一の目的に供せられ、趣味を主とするとは云ひ乍ら矢張解説を助けて行くので、これに諸種の區別がある。即ち其の性質の上より、

1 實話 2 假話

實際にあつた話と、假りに作つた話、其實話の中にも、

- a 歴史談
- b 見聞談

があり、其の假話の中にも、

- a 已に先人の使用したもの、
- b 自己の假作に出づるもの、

の別がある、例へば何々といふ書にかういふ話があつたといふごとく先人の假作を引用するのと、或る所にかういふことがあつたと漫然と自己が腦裏より作り出したのとで、此の假話の中には又實際有り得べきことを假作した

或る所に七人暮しの家と二人暮しの家とあつて、七人暮しの方は睦しく暮らし居るが、二人暮しの方は毎日喧嘩の絶え間がない、或る時二人暮しの方の主人が、七人暮しの主人に向つて「私の家は何故に喧嘩が絶えないのでしよう」といふと七人暮しの主人が答へて「それは善い人ばかり御居でになるからで私の家は悪い人ばかりですから、喧嘩はござりません」何故「それは腹が立つことがある毎に名目、自分が悪い自分が悪いと思つて居ますから喧嘩は起りませんが貴方の

方ではお互におれがよい〜と善い人ばかりだから喧嘩が絶えませぬ」といふ如きは實際有り得べきことですが、兎と龜との話とか云ふ如く實際あり得べからざるものも亦假作して趣味と説明との二に供することが出来る。更に之を趣味の上から分つて、

- 1 滑稽談
- 2 悲哀談
- 3 悲壯談
- 4 善行談

等とすることが出来ませんが、それは略しまして茲には是等の挿話的の説話が話材として如何なる價値を有するかを吟味しますと、教育者の所謂説話の價値たる

- 一、高尚なる愉悅を與ふる事。
 - 二、徳性を涵養すること。
 - 三、趣味を啓發すること。
 - 四、知識を豊富にすること。
- を兼ねることが出来るのであります。

涅槃經の八喩

是等廣義の譬喩（實例挿話等を含まして）に就て涅槃經に八喩といふことが説いてあります。一寸面白いからこゝに紹介しましょう。

- 一、順喩
- 二、逆喩

これは喩の組立の上からいふたので、順喩といふのは世間に順じて説くで、先づ目前の事實から高遠なことにまで及び小より大に向ひ「天が大雨を降らすと溝が一杯になる、溝が一杯になると小さな堀も亦次第に一杯になる、小さい堀が一杯になると大きな堀に滿つる、大きな堀に滿つると小さな河に滿ち、小さな河に滿つると、大きな河に滿ち、大きな河に滿つると大海に滿つ」といふ如きは順喩、

「大海の本は大河、大河の本は小河、小河の本は大堀、大堀の本は小堀、小堀の本は溝」といふ如く大より小に及ぶは逆喩であります。

三、現○喻○ 四、非○喻○

これは喩の性質からいふので、現喩は現前の事實を喩に取つたもの、非喩は假りに設けて喩としたので、一は實話二は假話である。

五、先○喩○ 六、後○喩○ 七、先○後○喩○ 八、遍○喩○

此の四つは譬喩の布置の上の分類で、喩を先きに置くのと、後に置くのと、先と後に置いて中間に自己の所説を入れるのと、初めから終り迄譬喩ばかりで實説を裏面で隠す寓喩の類とを擧げたのです。材料に關する注意はこれ位で、更に構想の原則に入つて御話いたしませう。

六 演説の構想

構 想 の 原 則

理○想○と現○實○と其調和とは演説法の三大着眼點であるから今想を構へて一席の演説を組立てんとするにも常に此三點に着眼して、先づ、云はんとする事件又は問題に就て充分なる觀察を爲し、それを本として云はんとする思想を定めねばならぬ。即ち

- 一 當該事件(問題)の觀察
- 二 當該事件(問題)の追憶
- 三 當該事件(問題)の推量
- 四 當該事件(問題)の斷定

といふ順序で、例へば現時の代議士選舉の狀態に就て論ずるならば、其の方法は

如何なるものが用ひられつゝあるか、選舉人の自覺は何の點にあるか、戸別訪問の効果、言論戦の實蹟、候補者の人格等を仔細に觀察し、次ぎにかくの如き状態となりし過去の歴史を追憶し、更に此弊は如何になり行くかを推量し、而して此弊を矯むるにはかく／＼の方策を講せざるべからずとの斷定を生じ、其の斷定を主想とし、一席の演説中一切の思想を統括するの主腦たらしめる、併し此主想だけは演説に組立てられぬ、此れに伴隨して其の目的をして一層明確ならしむるもの即ち客想といふものが必要であり、更に此の客想と主想とを結びつける媒想といふものが必要であります、これは一般思想の原律より出たので彼の論理の三段論法には必ず主語と、客語と媒語との三を要し、此の三は又主想、客想、媒想を示して居る如く、如何なる論議の上にも思想整頓の上には必要なる條件であります。一つ論理の例を引いて見ると、

大前提 凡そ金剛石は可燃物なり。

小前提 此の寶石は金剛石なり。

斷案 此の寶石は可燃物なり。

の如く斷案に於ける寶石といふ主語と可燃物といふ客語とは金剛石といふ媒語によつて結合せられて居るので、大前提は論者の云はんとする斷定即ち主想を引き出すに就ての客想で小前提は媒想の位置に當るのであります。更に東洋論理たる因明の三支作法によれば、

宗 金剛石は可燃物なり。

因 炭素物なるが故に。

喻 凡そ炭素物は燃ゆ、喩へば石炭の如し。

といふ、宗は主想、因は媒想、喩は客想となる如く、主、客、媒、の三つは思想組立ての骨子で、如何なる大演説も其の骨子となるものは此の三つであります。論理學や因明學は雄辯研究者の是非参考せねばならぬ基礎學科で、正當に自己が

思ふが如き斷案を造らんには如何なる大前提を用ふべきかを考量し、例へば

巨萬の富を積むとも死の運命は免れ難し、

との斷案を演出せんには「凡そ人は死す」といふ大前提より來らねばならず、若し「牛馬犬豚も死す」といふ斷案を作らんには「凡そ生あるものは死す」といふ大前提を持つて來なければならぬし、逆に「人は死す」といふ斷案を説明せんには「生あるが故に」といふ理由を提供し、更らに進んで「生あるものは死す、例へば牛馬犬豚の如し」といふ喩を用ふる等思考の法則は此の論理に憑據せねばなりません。若し之を無視して推論の誤謬や思想の矛盾がありては如何に名論でも他を首肯させるとは出來ないのであります。よし一時は語勢や感情に迷はされてこれに拍手し喝采することがあつても、少しく聽衆の頭腦が冷靜になつて來ては其の誤謬は歴々指摘せらるゝに至るものです。よし聽衆は指摘せずとも此の如き不條理な演述は胡魔化しであり、不徹底であつて、辯論に従事するものゝ爲すべ

きものではありません。例へば全體に於て定められたることは之れを部分に應用することは出來ますが、部分に定められたることを直に全體に應用して「孔夫子は聖人なり」、「孔夫子は人なり」、「故に人は聖人なり」と斷定したりとするのは思想の法則を無視したものと申さねばなりません。

虚偽の論法

論理の法則を無視して組立つた論法を虚偽 (Fallacy) と申します。これは思考の混亂、不正確又は感情の激昂等によつて知らず識らずに生ずるものであるが、時には聽者を瞞着せんために用ふる胡魔化し者流もあるものであります。アリストテレスは之れを三種類に區別しまして、一は形式的の虚偽として三段論法の法則に違背した議論で、

自己の名をも書き得ざるものは官吏となることの出來ないものであります (大

前提) 何某は自己の名を書き得るものであります(小前提) 然らば何某は官吏たることを得ないものではありません(断案)

といふ如く、一見不當なことではないやうですが、官吏たるには自分の名を書き得る外に尙ほ外くの資格が要ります、名の書けないものは官吏たることを得ないとは云へますが、名の書けるものは皆な官吏たることが出来るとは申されません。これらは論理上の誤謬であります。(三段論法の規則第四條を犯して居るのです) 次ぎに言語上の虚偽といふのは、言語は同じことでも意義の違ふものを同じものとして取扱ふ。

夫婦喧嘩は犬も食ひません(大前提) 犬の食はないものは腐敗した食物であります(小前提) 故に夫婦喧嘩は腐敗した食物であります(断案)

の如きは、犬も食はぬといふ一つの言語であります、夫婦喧嘩の場合は單に譬喩として用ひたものを、次には犬の食はぬといふ實際に就て用ひたからでありま

す。これらを半論理的の虚偽とも申します。此虚偽は演説家のしばく陥るものでこの一種には質問によつて生ずる曖昧なる論法がある。よく論理書に引用せらるゝ例に、

汝は今親を打擲せぬか、何うか、

と問ひ、若し「然り」と答ふれば此人は曾て親を打擲した人となり、「否」と答ふれば今打擲して居る人となる。これは二つの質問を一つにしたので、正當にいへば(一)曾て親を打ちたりしか(二)今親を打擲せざるかとの二つで第一には「否」と答へ第二には「然り」と答へて此人の親を打たざることが明になるのであるが此二つを一所にして「今親を打擲せぬか」と問うては、何れにしても親を打つことになる。又、人あり、

予は虚言者である。

と云はんか、此の人は虚言者か不虚言者か頗る不明確である予は虚言者なりとい

ふことが虚言きよげんなれば其の人は眞實しんじつを語る人となり、予は虚言者きよげんしやなりといふが虚言でなければ、其の人は虚言者きよげんしやでなくなる。これは「予は虚言者であつた」といふ過去くわこと現在との言語の曖昧あいまいから起つた誤謬ごびやうであります。

第三は資料しりやうの虚偽しやうぎで之れは思考の資料となれる判断はんぱん其者の不正確ふせうかくから起るのでこれが辯論べんろんに従事するもの、最も注意ちゆういせねばならぬ所であるから煩はんを厭いとはず、少しく話して置くことにしませう。

論點窃取の誤謬

資料しりやう的虚偽しやうぎにもいろいろあるが、其の第一に論點ろんてん窃取せつしゆの推論すいろんといふのがある。これは斷案だんあん(即ち主想)を證明しやうめいするために掲ぐる理由の中に豫め斷案だんあんの眞實なることを假定して置くので、政治家が反對黨はんたいたうを攻撃するに、

彼の黨たうの政策は非立憲ひりつけんであるから攻撃こうげきせねばなりません。

といふは結構なやうですが、此の攻撃こうげきせざるべからずといふ斷案だんあんの理由なる非立憲ひりつけんといふことは果して事實じじつなりや否やを判明はんめいせずして直ちに此結論このけつろんに到達するのは大早計だいさいけいで、其の以前に非立憲なるや否やの先決問題せんけつもんだいを忘れて居るのであります。基督教徒きりすとが佛教徒ぶつがうとを攻撃して、

人は皆な神の子かみの子であります。然るに神を排斥はいせきするものは子として父を追ふものであります。佛教徒ぶつがうとは神を排斥はいせきいたします、これ子として父を追ふものであります。

といふ如きは基督教の宗義しうぎによつて他の宗義を律せんとするので、斷案だんあんに云はんとすることを前提ぜんていに假定してあるので、人は神の子かみの子といふことども、佛教徒ぶつがうとは賛成さんせいいたしませぬから此前提このぜんていから引き出した結論けつろんには何の痛痒つうやうも感せないやうなものであります。これらも亦人は神の子なるか否やの先決問題せんけつもんだいに於て對者の承認しやうにんを経なければ論歩ろんほを進むることの出来ない筈はずのものであります。

それに尙ほ此種の議論の中でしばしば陥り易いのは循環論法と申すことでもあります。これは一つの理由によつて自己の断案を證明し、其又断案によつて其の理由を證明するので、

人の性は善であります、日常さまざまのことを爲て居る時は氣が付きませんが、中宵人なき時、靜に考へれば何人も「あゝ悪かつた」といふ悔悟の念なきものはありませんからであります、何故此の悔悟の念が起るのでありませう、これは人の性は善なるからであります。

の如きで一の事を證明するの理由を以つて其の断案を證明することの理由とするので、こんな誤りは誰れにも氣がつくのでありますが、これが長い議論になりますと一寸氣のつかないやうになるものであります。

論旨相違の誤謬

これは今當に論すべきことを論せずして、他の事を論じて我が論旨を立て得たるやうに見るので、「彼の政黨は非立憲であります」といひ、其の何故なりやと問ふに對して「彼れは議會の多數を制して居ります」といふ如き議論で、多數と少數と、立憲と非立憲とは何の交渉もありません。即ち他の事をいつて自己の論旨を證明せんとしたので、

彼れは代議士たるの資格はありません、何となれば彼れは曾て學校に於て落第いたしました。

の如き當該断案と全く關係ない他のことを以て断案を證明せんとするので、これは時に正當なる論議を強て感情の方面に持つて行つて聽者を迷はすこととなりま

感情に訴ふるの弊

これは議論の正否を云はずして聽者の感情に訴へて自己の主張を貫徹せんと試

みるので演説家のよく使ふことではありますが、正々堂々たる論客の斷じて避くべきことでもあります。例へば、他人の議論を駁する代りに其の人格や職業をいうたりして、反駁の材料に供し、

彼れの議論は立派なやうではありますが、彼れの職業は何んであります。三百代言ではありませんか、諸君は三百代言の説に感服するのですか。

の如き、又は

佛教の教理は哲學的倫理的といひますが、僧侶の墮落はどうであります。

の如きの類で、其の尤も厭ふべきは多數人の同情や憐愍に訴へて自己の論證の弱點を蔽はんとし、又は多數人の反對し得ざる尊貴の語を引き來つて強て承認せしめんとするの類であります。尊貴なる語を引き來るのを不可とするのではありませんが、それによつて自己の議論の弱點を隠さんとするのは卑怯なことであります。

尙ほ此外にもいろ／＼な誤謬がありますが、それは論理の方に屬しますのでここでは略して置きます。

材料の整理

吾等は正しく思考の法則たる論理によつて當該事件に關する正當にして精到なる觀察をせねばなりません。正當なる思考のことは略ぼ前に述べましたから、之れに精到なる觀察を加へて、先づ材料を蒐集せねばなりません。材料の蒐集は

- 一 讀書
- 二 觀察
- 三 思索

の三方法によらねばなりません。書籍は知識の庫でありますから、幾多の材料は此の中から得られるので、當該事件に關係する書を読んで其の問題に關する知識を豊富にして行くと共に其の事件の實狀を觀察して書中の理論と實際との關係を明かにし、之れに加ふるに充分なる思索を以てして初めて自己の思想内容を整理

し、云はんとする思想を構成することが出来るのであります、かく客観的なる讀書と観察とに主観的なる思索を加へて得來れる材料を分解して、時間的には其の原因結果の關係を明かにし、何れか因何れか果と分ち、空間的には隸屬關係を明かにし、何れか主、何れか従なるかを定め、且つ比較法を以て各材料の類似點と背異點とを分ち、斷片的に集められたるものを系統的に排列し、多くの小なき思想を概括して一席の演説に組み立てるので分解と概括とは思想整頓の要件で、材料の整理にも此の二つの方法を逸することは出来ません。

全體の構成

かくして統一齊整せられたる思想を表現するには常に論理を一貫せしめて、こゝに組立て來るので、或は前提より斷案に至る西洋論理の法則によるか、斷案を先きにして理由を後にする因明の論法によるか、同じ西洋論理でも先づ何人も疑ふ

べからざる大前提を出して當該事件に及ぶ演繹法によるか先づ個々の事實を本として斷案を得來る歸納法によるかは、其の論理や取材の都合によるのであります論理的といふことが必要であるが、演説の組立は論理的の方面のみから見る事が出来ないで、別に修辭的組立をも顧慮せねばならぬ、何故かと申しますれば演説は單に理智に訴へるばかりでなく、之れを感情にも訴へて自己の主張を承認せしめねばならぬのでありますから論理の外に修辭の方面の注意が必要となるのです、修辭の方面は主として語句の布置に關するのですが全體の構成としては思想の位置によりまして、綱領一段格とて主想を初めに置くものと鶴膝法というて中腹に置くものと收束法というて終りに置くものとあります。綱領一段格は最初に自己の主張を説いて漸次其の理由を説明して聽衆を首肯せしむるに至るものから解説から入つて證明に至る順序になり、因明のやうなやり方になります。收束法は先づ自己の主張の由て來る所を述べて終に其の主張を明にして賛同せし

むるのでありますから丁度演繹論理のやうになり、鶴膝法は先づ自説の由來する所を證明して自己の主張に入り、更に之れを解説して行くのでありますから、歸納に出立して演繹に入るといふ風になります。これらは大凡その區別でありまして其の應用は主題の性質(理想)や聴衆の状態(現實)等を斟酌して定むるので、こゝにも理想と現實と其の調和との着眼點は必要であります。以下少しく聴衆の心理に就て一瞥いたしませう。

七 聴衆の心理

聴衆と群衆

演説は獨り勝手に喋つて居るのでなく、常に聴衆を相手にするのであるから、言辭の使用に就ても、材料の蒐集に於ても、構想の上に於ても聴衆の性質を知るといふことが必要であります。講義なぞの場合には聴衆の性質は一定して居りますが、演説となりますると頗る雑多で、それが群衆の状態を爲して居るのでありますから、先づ群衆の心理といふものを知つて置くことが聴衆の性質を知るに最も必要なことであります。一體群衆心理とは何かと申しまするに單に異種類の人々が多數寄り集つて居るといふだけでは其處に群衆心理を認めるわけにはゆかないので多數の各個人が同一場所に寄り集つて、同一方向に活動する所の一團となつた心理に至つて始めて群衆心理と名づけられるので多數の各個人が個人々々に

意識の活動をして居るのでは何程多數が寄り集つても以て群衆心理と呼ぶことは出来ません。故に群衆心理の成立には少くとも、

一、集合した各人は、各人の意識的個性を消失すること。

二、集合した各人は各人の思想感情を同一方向に走せること。

の二條件が備はらねばならぬ。即ち群衆心理なるものは、群衆各自の意識的個性を消失して一個の無意識的共同性を作る。之れに就いて、ルボンの「群衆心理」には詳しく説かれてあるので今それに依つて大要を述べることとにせませう。

抑も人は各自個性を異にして萬人萬様であります、其れは各人の智的方面から見てもいふことで、其の本能性は感情方面から見るときはさまで異はぬものであることが認められます。例へば大學者と一労働者とは其の智識に於いて非常な相違があります。愛憎喜怒の感情の上から見るときは大抵相似たる様子のあります。群衆心理は斯の各人がさまで相違して居らぬ感情方面の結合に外なら

ぬのであります。故に群衆心理の特徴は各個人の智力が弱り、個性の勢力が鈍り感情が知識を壓倒し、意識的分別が打ち消されて無意識的行動が撞にされるといふに至るのが自然の勢であります。此點をルボンは

「群衆は共同的に平凡なる性質のみを具備す」

と喝破し、更に

「全世界人の知識を集めたならば大哲學者ヴォルテールよりも優れたる智慧が出るであらう」

との西諺に對して氏は斯ういつて居る、

「若し全世界人といふことが群衆を指す意味ならば、ヴォルテールこそ全世界人よりも優る智慧を有するものである」

と、ルボンは群衆の心理は智力の乏しいもので、たとへ全世界人を集めるとも、若しそれが群衆心理であるならば、其の智慧は一個人の智力にも遠く及ばぬと説

いて居るのであります。

群衆心理の特色

ルボンは群衆心理を個人の心理に比べて見て、個人としては有しない群衆心理の特色を擧げて

(一) 群衆は多数を待む一念から、他に負けないといふ一の強い力を得たるかの如く感じ、單獨の場合には抑制される本能が猛烈に頭を擡げ、全く責任の觀念を消失するものであるというて居ります。

之れは尤もな説明で、實際群衆といふものは無責任なもので、此の事は一度演壇に立つて群衆に對したお方は何人も容易に認められる事實で、一例をいふならば、若し個人々々に話をして居る場合、相手が話し半ばにツと立つて往つてしまふ様なことはないのですが、演説の場合には面白くないと聴衆は平氣で立つて行

つてしまひますし又個人々の應對の時には必ず相手相應の禮儀を缺かさぬが、演説の場合には禮服を着けて正しい態度で正面に立つ辯士の前に在つて、帽子を被り、襟巻などをしたまゝで平氣で居るといふ聴衆のあることは、屢々見る事實であります。之れらの態度が個人々の時は無くて群集たる時に見られるといふのは、即ち責任の觀念が消失して居るので、此の演説は何もおれ一人が聴くの外ぢやない。多数の人が聴くのだといふ考が斯うした無禮を平氣でせしめるの外ならぬのであります。尙ほ其他一人々々の話しに對して冷評惡罵を浴せるなどのことは少いが、演説の時は随分思ひ切つた惡罵冷評が逞うせられるなども矢張り此の無責任といふ群衆心理の特色であります。

(二) 群衆の心理は傳染性を有するものであります。例へば満場が靜肅に謹聽して居る際に當つて、誰か一人バチ／＼と沈黙を破つて拍手をすると、忽ち彼處でも此處でもバチ／＼とやり出す。初めの一人が拍手したのは何故であるかは知ら

す、たゞ無意識的に他の者も拍手する。一人が「ノー／＼」とか「馬鹿！」とか悪罵冷評の一語を擧げると、忽ち静肅は打ち破られて満場喧囂を極める。之れらは皆明確な意識から相當な理由の下に爲されるのでなくて最初一人がやり出すと次から次へと無意識的に波及する。即ち單純な傳染性に過ぎないものであります次に群衆心理の特色に

(三)暗示享受性があります、即ち群衆は極めて暗示にかゝりやすいもので、僅かの暗示によつて極端に動かされるものであります。此の暗示といふことに就いては後にお話することゝしますが、要するに

群衆の感情は頗る簡單

なものであります。以上のやうな特色の心理を有つた群衆は推理の力が非常に弱いのですから群衆に向つて推理の力に訴へて議論を以て感化しようといふことは

不可能なことであります。群衆は面倒な議論を理解するにはあまりに意識が單純であります、群衆は理知が鈍つてて全く感情的になつて極く表面的な皮相的な見解を有つて居るのでありますから、之れに向つては筋途の込み入つた論理よりも單刀直入宜く焦點を捕へて先づ斷案を提示する方がよいのであります。ルポンは群衆の心理は透明な氷片が口中に於いて溶けたのに依つて、透明な硝子片も亦口中に入れれば溶けるものと心得る如きものである。

というてをります。群衆の心理は斯れほど幼稚で、推理論究の力は頗る弱い、否な推理判斷の力は全く喪失されて唯單純な想像力があるに過ぎないと謂ふべきであります。されば吾々が群衆を感化しようといふ場合には此點を呑み込んでおて細かい議論は成るべく避けねばなりません。試みに群衆を感動せしめた古今の有名な演説録を見るに、之を論理の上から批判するときは何れも決して確き論據ある名論卓説ではない。論據は寧ろ極めて薄弱であります、しかし其中に寸鐵人を

刺すが如き警句を用ゐて聴衆の感情を刺戟するものがあります、群衆の感化は之れが適當なのであります。

パトリックヘンリーが「我れに自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」と絶叫して群衆に非常な刺戟を與へたのや、シーザーの死後アントニオが權力を恣にした時に當つてはシセロが「自由か奴隷か國家の問題なり」と曰ひ又「自由はローマ人の特權なり」と叫んだ、此の片言隻語が千言萬語に優る強い力があつたなどは正に此の例であります。斯様に群衆は推理の力が非常に鈍いのであります。其代り感情の力は非常に鋭い、従つて印象を受くることが鋭敏であるから所謂暗示を受け易い。演説家は群衆をして此の暗示享受性に置くといふことが最も重要な條件であります。之れに就いてスコットの

雄辯の心理

には次のやうな注意事項が説かれてあります。

第一、演説家は先づ聴衆をして成るべく密着して座せしめること、演説の時に若し聴衆が演壇から五間も七間も離れてゐたり、又聴衆相互の座席の距離が非常に離れてゐて、彼處此處とまばらに座わつてゐたりしたのでは、第一辯士に取つて非常に話しがしにくいのみならず聴衆に感動を與へることは出来ないものであります。何故なれば上來述べて来たやうに諸聴衆をして群衆心理の状態に置くのは辯士にとると便利ですが、演壇に遠かつたり聴衆相互相離れてゐては、どうしても各自の個性を消失せしめ難いから、所謂暗示享受性に置いて感動せしめることが出来ないで、どうしても聴衆を密着して座らせるといふことが必要であります。

第二、一座の聴衆をして行動を一致せしむること、各自が各異の行動を取つてゐては個性が明確で所謂群衆心理の状態になり難いのですから、唱歌とか禮拜と

かを以て先づ其の行動を共にせしめることが必要であります。スコットは、

予は米國の有名なる傳道師が教習室に於いて、讚美歌を誦はざる者に對して無理に一々本を與へて皆と共に之れを誦はしめてゐたのを見た、之は群衆心理に導く最も良き豫備である。

と、或は肖像に對して一齊に敬禮するとか、勅語其他の朗讀を爲すとかさういふことは皆聽衆をして行動を共にせしめるに有効なもので、行動を共にせしめるは群衆をして暗示享受性に導く所以、感動を與へ易からしめる所以であります。

第三、群衆をして豫め悦ばせて置くこと、演説の時先づ聽衆をして好感情を起さしめるといふことは、辯士として談しもしよいし、又感動も惹き易いのは言ふまでもありません。辯士が演壇に現はれるや最初から悪感情を以て聽衆に迎へられた日には、どうしても思ふ存分の講演も出來ず、反對觀念の處にいくら説き立てた所で何の感動も與へられるものではない、故に先づ聽衆を悦ばせて好意を以

て話しを聽かんことを希ふやうに感情を一致せしめて置くことが必要であります

第四、成る可く共通觀念を表現せしめること、即ち群衆の總てに通じて何人も反對し得ないやうな話し方をするといふことが必要であります。例へば佛教に偏すれば其中に耶蘇教信者が居れば必ず反感を懷くし、耶蘇教専門の事を言へば耶蘇を信せぬ他の者は面白くない。故に種々な方面の人が寄り集つての聽衆に對しては、修養の話をするにしても或は道徳を説くにしても一宗一派に偏した用語を使はずして、同じことでも日本國家の爲めとか、社會人類の爲めとか、之れが人生の勤めだとかいふ風に総合的な包括的な語を用ふるときはどの方面の人にも差し障りはなく、以て思想感情を共通な状態に結び付けることが出來ます。

以上の諸條件は皆群衆心理の特色を捉へてそれに適應して尤も有効に演説講話の目的を達せしむるもので、要するに群衆心理を利用して聽衆を一團とし暗示を受け易からしめ感動を深からしむる所以であります。

八 演説と暗示

聴衆をして群衆心理の狀然にあらしめるは辯士の與ふる暗示をして有効ならしむる所以で、此點から演説は一種の暗示法であると申しても差支はありません。私は曾て「雄辯に於ける暗示の力」と題して此事を論じたことがありますから、多少重複の嫌ひはありますが、こゝに之れを掲げまして如何にすれば暗示が効を奏するかを示すことにいたしませう。

暗示の力

「壇上の一言直に人を動かすものは暗示の力である。緻密なる思索、精細なる觀察は辯士に缺くべからざる豫件ではあるが緻密なる推論や精細なる説述法は人をして理解せしむることは出来ても感動せしむることの出来るものではない。

「學者と共に考へよ俗衆と共に語れ」俗衆に理解せしむるだけの講話でも、學者らしき推論、専門家特有の言語では其目的を達することの出来ないもので、經驗ある講演者は常に専門語の通俗化、耳に入り易き推論を用ゐんと苦心して居るほどであるから、感動を目的とする演説に面倒な理窟や、難解かしい言語は大の禁物である。

一體「人は理性に動くなり」などいうて人間といふものを論理の機械のやうに思ふのは一大謬妄で、人間は決して冷かなる論理の機械でもなく理性によつてのみ行動する單純なものではない。一切の議論の後には趣味の背景があり主義主張の本には情執の根深く流れて居るものがあつて、其背景に左右せられ、其の根に動かされて理窟や推論では如何ともし難きものがある。理を以て立つ者は理を以て破れるわけであるが「道理はさうでもさうは思はれぬ」といふ悪い執着が根強く心の奥に蔓つて居る。學者已に然り況んや俗衆の行動は主として習

慣と模倣と暗示とに支配せられて居て推理の力なぞといふものは極く微弱なものである。しかも其等の俗人を一所に集めて群衆の状態に置き之れを動かさんとするに、勞徒らに多くして功頗る少いのは當然の理といふべきである。

群衆の被暗示性

ルボンもいうた如く個人々々としては理性の備つたものでも群衆となると其個性は消失し、其理性は影を潜めて、本能の力は頭を擡げ、意識的狀態より無意識的狀態に入り、傳染せられ易く、暗示せられ易くなるものである。此者共に對して精到なる推論を振り廻して緻密なる理窟を列べ立てたからとて、所謂大聲は俚耳に入らずで何の反應もあるべきものでない。ルボンは這の間の消息を道破して、「群衆は緻密に思考せられ精到に推論せられた千言萬語の名論卓説よりも、耳に入り易き片言隻語に動くものである。」というて居る。

群衆の心理既に此の如しとせば、群衆を動かすものは理論にあらずして簡単な促言である。シセロの多くの雄辯は忘れられても「自由は羅馬人の特權なり」の一語は深く聽集の腦裏に印し、バトリック、ヘンリーの千言萬語は思ひ起さずとも「我れに自由を與へよ然らずんば死を與へよ」の一句は聽衆をして忘るゝなからしめたのも全く此の簡單なる促言の力である。矢野龍溪氏の「浮城物語」に「我に經驗あり、他國の士兵を率ゐるの法、號令簡單なるを要す、進撃發銃、繰引、休息の四語をすれば足れり」とあるのも、此群衆の心的狀態を看破したるものである。ダル、スコットの「雄辯心理」にも亦此心的狀態を捉へて「人間を指揮する偉大なる人物は決して其部下を推論するに長じたものでなく、又人間を感化する偉大なる人物は尤も論理的に自己の眞理を群衆に現はす人でもなく。彼等は其言語態度等の刺戟によつて群衆を暗示するものである」というて居る。

吾等が平常の行爲は一の動機の起る毎に、之れを他の動機と比較選擇し、其何れに就くべきかを思慮し、思慮の結果之れを決定するの順序を取るものであるが、大雄辯に接する時は其順序は全く忘れられて、其の云ふ所直に暗示となつて何の選擇なく直に決定せる行爲となるもので、かく聴衆の心理をして選擇し、思慮するの暇なからしめ、直に辯士の所説に服従せしむることを得ば、之れ演説に於て尤も多く成功せる時である。

被暗示状態

如何にせば斯く爲すを得べきか。催眠術に云ふ所の暗示の理法は悉く演壇に應用せらるゝので先づ聴衆をして暗示を受け易き状態に置くといふことが必要である。暗示を受け易き状態とは其個性の力を微弱ならしめて心内に起り來らんとする他の觀念を防止するので、之には個人的状態を脱却して暗示を受け易

い群衆の状態に置くを第一とせねばならぬ、如何にせば群衆の状態に入らしむることが出来るか、これはスコットもいうて居る通り、

- 一 聴衆と辯士とを密着せしめ、聴衆と聴衆とを密着せしむること
- 二 聴衆をして同一態度を取らしむること

が尤も必要である。聴衆と辯士との間が餘りに離れて居つては心と心と相通せず、辯士の強烈なる觀念を以て聴衆の微弱なる觀念を征服し、彼等をして殆ど電氣を受けたる如くに、其暗示を受けしむることが出来ないものであるから聴衆と辯士とは成る可く密着せしめねばならぬ。聴衆と聴衆の間隔が甚くては相互に個人的自覺が頭を擡げて群衆の状態に入り難いのであるから如何なる雄辯家も空席多き會場で演説の爲難きを感じるは、全く聴衆は個々離れ離れになつて暗示を受け易い群衆の状態に入らないからである。之に反して聴衆の肩と肩と相觸れ、手と手と相接するやうに密集して居る時は心的共通此の間に行はれ

彼等の感情をして同一方向に向て赴かしめ易くなるから其演説も亦調子づいて其の暗示も亦功を奏し易くなるのである。次の同一態度を取らしむるとは一齊に敬禮せしむるとか同じく唱歌せしむるとかするので、スコットは之れに就て予は米國の偉大なる傳道者が讚美歌を謳はぬ聽衆の一人に無理に讚美歌の本を渡して謳はせようとしたのを見て、其用意の周到なるに感じたというて居る。日本の傳道者の中にも此の手段を取つて居るものは少くないので、佛教徒の方でも一齊に念佛や三歸を唱へさせてから説教するのは普通のとであり、或る禪師は登壇後五分間は静座瞑想せしめてから話を初め、教育演説家として有名な某氏は最初に必らず勅語を朗讀して聽衆を同一敬肅の狀に在らしむるのもある。これらは皆な群衆心理の狀態に至らしめ暗示を受け易からしむる一種の手段であり方法である。

會場の整理

次に必要なるは辯士の與へたる觀念をして聽衆の心理を占領せしめ、他の觀念を起さしめぬやうに聽衆の意識を制限し、一も二もなく其のいふ所を受け入れしめんとするので、それには會場を整理して聽衆の觀念を成るべく平穩なる狀態に置かねばならぬから場内の喧擾を止め、其喧擾によつて觀念の集注を妨げぬやうにせねばならぬ。不注意なる司會者が聽衆の耳目の焦點たる辯士の前後左右を往來したり不謹慎なる來聽者が互に耳語したりするのは辯士の暗示力を妨げ、其演説を困難ならしむる主要の因を爲すものである。況んや悪罵冷評交も起つては暗示力を拒斥し、反對觀念を聽衆の心理に起さしむるのであるから、先づ此の喧擾を静めねば、有功に演説することの出来るものではない。

威 嚴

聽衆を被暗示状態に置く第一義は辯士に威嚴がなければならぬ。若し辯士に何の威嚴もなく初から輕侮を以て迎へられた時には反對觀念が聽衆の心理に跳梁して其説服に幾多の困難を経ねばならぬ。ルボンに之れを論じて「威嚴は吾等の心意上に及ぼす一種の威壓である。此威壓は吾等の批判的機能を麻痺し驚異と尊敬とを以て其の心を満たすものである」といひ、これを後天的と先天的に分けて居る。後天的とは家名とか財産とか肩書とか世評とかを指すので、之が聽衆の心に與ふる威壓は偉大なもので、其名を聞いて初めて感服してかゝるのであるから暗示を受け易いのは云ふ迄もなく、甚しきは家を出る時から暗示を受ける準備をして居るやうなものもある。先天的といふのは全く其人固有の性格で聖賢や偉人に見る所の人格の力である。之等の威壓は暫く別として、直に

壇上に於ける辯士に就ていへば、其登壇の初めに於ける態度が一種の威嚴となつて聽衆に第一印象を與へるもので禮儀正しく態度に品位あらんか、其第一印象に於て信用を置き、耳を傾くるの用意となるが、若し如何にも無作法で品位なき態度ならんか、其の第一印象は輕侮となつて暗示を受け難き状態に入るものである。

説 述 方 法

態度先づ聽衆の信用を得ても説述の方法宜しきを得なければ、疑惑の念起つて信服の態度は一變して批評的となり、疑惑募るに従つて苛批酷評となり暗示は到底功を奏し難きに至るのであるから辯士は登壇の初に聽衆の疑惑を一掃して其所説に信用を置かしめねばならぬ。彼のマーク、アントニオがプルタスの後に立ちて「予はシーザーを弔はんが爲めに來たのでシーザーを辯護せんがた

めではない」と揚言し陽にブルタスを賞讃して聴衆の疑を解いた如きは尤も狡
獪なる説述法であり殊に多くの反語を用て次第々に聴衆の心を自己に傾けし
め、終に全く聴衆を魅了つて其心を被暗示的狀態に置き、聴衆自ら期する
が如く聴衆をしてブルタス反抗の聲を擧げしめたのは尤も巧みに群衆心理を利
用した説述法である。曾て某政黨の名士が反對黨の盛な所に遊説を試み、出る
辯士も出る辯士も、冷嘲熱罵の爲に妨げられ演説半ばならずして壇を退く後
出て雨と降る冷評を耳にもかけず、靜かに口を開いて「當地は舊何々藩の領地
であつた。抑も藩祖何々公は……」と藩祖の功績を述べ立てたから誰一人冷評
するものもない。斯く諄々と藩政の事を賞讃して之と現政府の方針とを比較し
「其藩政の下にあつたものが……」といよ／＼本音を吹き出した時には敵も味
方も一齊に喝采して全く其演説に釣り込まれてしまつたといふことである。之
等も亦説述の方法其宜しきを得たものと云はねばならぬ。此の如きを間接暗示

といふ。間接暗示は巧みに反語や諷刺や嘲謔を用ひて陽に聴衆の意を迎へつゝ
陰に自己の所説を述べ知らず／＼の中に聴衆をして自己の所説に同せしむるの
で、スコットは之に就て「此方法によつて辯士は自己の結論を表現する前に聴
衆の心裡に辯士の結論を待たしめ、辯士が結論に達する時は聴衆は其心に期し
たものと一致するが故に、確乎たる眞理として受け込ましむることが出来る」
というて居る。此の暗示は修辭上の技巧を要する困難なるものではあるが、古
來雄辯家の尤も多く使用せるものである。

斷言と反覆

直接暗示の方法は簡單にして奇抜なる斷言で、何等考慮を費さずして聴衆の
受け入れらるゝもの、即ち否か諾かが判然と表示せられ解説や立證の必要なく
且つ全然非讓歩的なるを要するので、少しでも説明を要したり例證を擧げねば

ならなかつたり又讓歩的の句が加はつては緊張したる聴衆の心を弛めて被暗示的状态を脱し批判的状态に入らしむるものであるから、首を以て直に肺腑を貫く如き明確なる断言でなければならぬ。其時に奇抜なるを要するのは、平凡であれば刺戟が強烈でないから暗示を受くことが強烈でないが奇抜なれば奇抜なるほど注意力を集注し暗示を受け易からしめるのである。併し其の事があまり奇抜に走つて聴衆の實生活と没交渉では又之を受け入れることが出来ないのであるから平凡なる真理の奇抜なる言ひ廻しは演説家の尤も工夫を要する所である。若し夫れ其の断言が反覆せられ一回二回と數を重ぬれば、最初はさほどまで感ぜざりしことも、「上手な大工でも釘は一邊には打てぬが、下手でも何邊も打てば釘が入込む」といふ如く繰返々々する中に自ら聴衆の心に浸徹して明確なる真理として受入れられる。

暗示と人格

暗示には強烈なる刺戟を要する。演説に於る暗示は主として口より出で耳に入る音聲の力であるから、此音聲が何の刺戟もなき手ぬるき調子であつたならば、聴衆の心は他に散亂して雑多の觀念其間に起つて被暗示性を攪き亂すのであるから辯士の腹の底より出で聴衆の腹の底に入るほどの力強きものでなければならぬ。所詮暗示は強力の威厭であるから力なき音聲は何の反應も與へることが出来ない。力ある音聲は辯士の熱情より出るもので熱情なき演説に力ある音聲の出るべきではない。力なき音聲は暗示を與へ難しとせば演説に於ける暗示奏功の第一義は辯士の熱情である。自ら感憤せずして他を感憤せしむるとは出来ない。雄辯の奥には感憤あり、暗示奏功の後には熱情あり、此感憤進つて人を動かし、此熱情溢れて人を感せしむ。如何に技巧を弄するとも、此の感憤

なきものは皮想の態度虚偽の言論たり、如何に聲を大にすることも、此の熱情なきものは空虚の響のみ。暗示は一種の精神靈動、甲の人格の力を以て乙の人格を征服するのである。』

演説は暗示であります。暗示は辯士の言論によつて迸り出る人格の力が聴衆を壓服するのであります。此の暗示の利用が演説法の要義であると申しても差支はありません。云ふまでもなく暗示は一種の精神靈動でありますから、辯士自身に感動する所なくしては、如何に與へんとしても其の暗示は効を奏するものではありません。

九 感情と表現

心身の相関

辯士の口より迸り出る言論の力を以て聴衆を壓服せんとするには、辯士自身の感情並に其の表現法に就て少しく考へを運らさねばなりません。一體身と心即ち肉體と精神とは近世心理學の示します通り密接にして不離の關係を持つて居るものでありまして、腹が立てば呼吸がせわしくなり、顔色が赤くなり、心配すれば物が食へなくなり、顔の色が悪くなり、溜息をつくといふ風に、吾等の感情は肉體の呼吸運動並に血液運動さては發汗運動や消化運動等に關聯し、手足の震慄、顔色の變化等に現はるゝもので、

忍ぶれど色に出にけり我が戀は

ものや思ふと人の問ふまで

の古歌の如く相互に關係して居るので、思ひ内にあれば色、外に表はるではあります。又悲しさうな様子をすると自然と悲しくなり、嬉しさうな様子をすると自然と嬉しくなるやうに肉體の方から精神に影響することもあるもので、敬虔なる態度で禮拜をすれば自ら敬虔の感情が起り出るもので、禮容を正しくするはやがて心を正しくする所以であります。虚偽の態度や、外面の表情のみでは到底人を動かすことの出来るものではありません。或る俳優が忠臣蔵の芝居に彌谷判官に扮しまして高師直を切りつける所をやりましたが、何回やつても其の師直に扮して居る役者が大根々々、そんなことで切りつけられるかと看客に聽えるやうに罵りますので、判官役者も腹に据ゑかねて今日こそは眞實に切りつけてやらうと決心して、怒氣心頭に發して進み寄りますと、「巧い／＼、それでなければならぬ」と小聲でいうたと申すことがあります。矢張内自ら感じて其情は自然に外に表現せらるゝものであります。演説も矢張り其の通りで、有名なるシセロは「演

説者自身が既に聽衆と共に痛切に感動せしめられ、且つ熱烈火の如き情を以て自らの胸を焼くにあらざれば聽衆をして泣かすしめ、恐れしめ、又は憫れがらすことは出来ないものであるから予は自ら聽衆の胸に通ずる如き感情なくしては決して泣き、恐れ、憫む等の感情を鼓舞したることなし」というて居ります。演説で尤も必要なのは聽衆を感動せしむる爲めには先づ自らを感動せしむることでありま

自ら感せよ

如何に言語や身振等の外見のみを以て悲喜を装うても、心に其の眞情がなかつたならば、徒らに聽衆の笑ひを買ふの外、何者をも得ることの出来るものではありませんが、聽衆の望む所の感情を先づ辯士自身の心に起し、聽衆に觸れしめんとする前に辯士自ら先づ之れに觸れねばなりません。スコットの「雄辯心理」

にはシセロの言を引いて、「予は演劇に於て俳優が或る技を演じ了りて舞臺を退き樂屋に入りて其の假裝を取り除きたる後にも尙ほ看客が啼泣しつゝある光景を見ることがある。若し俳優に何の感情もなく、たゞ與へられたる脚本を看客の前に演じて居るだけであつたならば、如何にして此虚構の感情によつて力を入れて演ずることが出来、又如何にして此の如く看客を動かすことが出来やう、看客も亦如何にしてかく魅せらるゝに至らう。これ全く俳優が何等の感情もなくして單に技巧的に演ずるにあらずして彼等のあらゆる感情が彼等の演ずる役に注ぎ入れられて居るからである。此一事は演説を學ばんとするものゝ看逃すべからざる重要な技能で、此技能によつて予は少くとも自分の演説上に於ける今日の名聲を博し得たと思ふ。即ち予は一切の感情を悉く眞實より流露せしめたのである」との意を挙げ、且つ同書には演劇批評家ウイリヤム、アーチャーが「俳優は果して自ら演じつゝある役の感情を感じるものなりや」との問題を提出して多くの俳優

に解答を求めたことがあるが、其の答辯は悉く、俳優は自ら扮する役の感情を充分に感ずといふに一致して居つたといふことが擧げてあります。「八水隨筆」といふ書物に劍客澁川伴五郎が人に誘はれて初めて市川團十郎の芝居を見て天下の名優なりと絶賞しましたから、人が貴殿は初めて芝居を見て、何うして解るかと申しますと、私は芝居のことは知らぬが、あの役者が刀を提げて花道から出る時我が劍道の上から見て、どこからも打ち込む隙がない、して見ると彼れは藝を命懸けでやつて居るから名人に相違ないというたといふことが出て居ります。すべて何事によらず自分が其の心にならねば他を動かすことの出来るものではありません。

情緒の發出

併し先きにもいひました通り身心は相互の關係でありますから、身體の方を其

の態度にいたしますと自然に其の感情の起るものでありますから情緒と身體との關係に就ては一應心理學者の所説を聽いて置かねばなりません。ランゲの情緒論によりますと、失望の情緒には有意衝動が減少いたしますし、之れに血管の收縮が加はりますと悲哀となり、更に無意筋の痙攣が加はりますと驚愕となりますし此の有意衝動の減少に運動の擾亂が加はりますと狼狽となり、緊張には有意衝動が昂進し無意筋は痙攣しますし、此有意衝動の昂進に血管の膨脹が添ふと喜悅の情緒となり、更に運動の擾亂が加はると忿怒となります、更に心理書のいふ所によつて情緒の表出の主要なるもの二三を挙げますと、悲哀及び心配の時には眉の内端を互に引き寄せて之れを引き下げますから眉と眉との間に縦の皺を生じ、それと共に額の筋肉を收縮せしめますから横の皺を生じますし、心に苦痛を抱きまする場合には口の兩端を下に引き下げます傾があります。泣き出さうとする時には初めは之れに抵抗せんとしますから口の括約筋が收縮しまして所謂隘面とな

り、終に叫び出すに及びましては口の括約筋は負けて口を開きますが、全體の筋肉は收縮し眼瞼も亦收縮して眼球を推しつけて涙を下します、之れに反して笑ふ場合には口の括約筋は緩みまして自ら開け、鼻の兩側より口の兩角に對する二個の皺を生じ又下脛部も收縮して、眼の外角に少しく皺が出來ます。同じ笑ひでも冷笑の場合には精神に快樂がないのですから、容易に愛嬌なく厭ふべき状態にあります。其他決心の場合には口を閉ぢ、忿怒の場合には顔色に勢力を表はし眼光鋭く血液の循環烈しく、恐怖の場合には決心や忿怒と反し、全く自身の力を棄て、口を開き眼を開き、精神力を發出する筋肉は緩みます。

以上は主として顔面に就てであります、これは何うしても心から動きませんと出來ませんことであり、且つ心にもなき外面の表出は到底人を感動せしむることの出来るものでありませんから強て此の發出を學ばんより自己の云はんとする感情を痛切に自ら感ずることが必要であります。

聲音と感情

既に感動が外に**迸**るといたしますると、それは言語並に身振手振に**現**はれるのです。先きにいひました通り、言語の音別とか音次とか音數といふことは誰れが云うても異りませす、

慨はしいこととでござります

といふ言語は甲の人も乙の人も異りはなくとも、**慨然**として聲を高く語勢を強くいふと**悄然**として聲を低く語勢を緩めていふとは聴衆の**感じ**が違ひまして前者には**激昂**の氣分を感じ、後者には**沈痛**の情を感ずるものでありますし、**眞**に腹の底から**悲**しさうに出る聲と上の空で口先から出る**輕**い調子とは其の**趣**が違ひます。言語は思想の符號ですから云はんとする思想は言語で現れますが、**辯士**の感情は單に音別や音次や音數では現れません。此言語の**缺陷**を補ふに説者の感情を

現はすものは聲音の抑揚、緩急、大小、高低等でありまして、前者を言語の客觀的要素といたしますれば、後者は其の主觀的要素であります。此主觀的要素の中に數へらるゝものは、音度とか音長とか音幅とか云はれるものであります。これらは皆な音樂の方の語から出たので、音度と申しますのは絃の一定の時間**に於ける**振動の度數によりて音に高低を生ずるので、小銃のバチ／＼いひますは音度の高いので、大砲のドーンは其の低いのであります。即ち高いのは澄み渡りて**輕**く低いのは沈みて深いのです、音幅は絃の振動する幅の廣狭によるので**蒸汽船**のブーは廣いのですが、汽笛のビーは其の狭いのであります、廣きものは強く、男らしく、逞しき感をおたしますし、狭いものは鋭く女らしい感をおたします。此の音度の低と音幅の大と相合しますと、莊重な感をおたしますし、音度の高と音幅の小と合しますと**輕浮**な感が伴ひます。否、莊重の情から出る聲は低く太く、腹から出るやうになり、**輕浮**の情から出る聲は、高く細く口の先から出るやうに

なるのであります。音長と申しますのは同一音の繼續する時間の長短でユーユー（悠々）といふは長くアクセク（醒醒）といふは短いので、長きは優揚、緩舒、沈靜、永遠等の情に伴ひ、短きは促迫、急激、短縮等の情に伴ふものであります。先きにいうた長呼音は音長が長くなるのですからゆるやかなる感情を現はし、撥音、促音等は音長が短くなりますかう忙はしき情を現します。若し其に兩々相争ふ有様を語るに當りて、音幅を大にし音度を低くし音長を長くせんか、

テークート、ミーカータガ、ターガーヒニ、シーノーギーラー、ケーゾーリ
ー、イーチジョウー、イーチゲー、キョーキョー、ジーツー、ジーツー、ア
ラソヒマシタ

といへば其の情を寫すことの出来ないのみならず、寧ろ滑稽に陥りますが、

敵と味方が、互に鎗を削つて、一上一下、虚々實々、

と音度を高く、音幅を小に、音長を短くして初めて其の情が現れ、

ポー／＼たる天地、ユー／＼たる宇宙

をいふべきをポポたる天地、ユユたる宇宙と促しくいへば、意味の一半を失はるやうなもので、音聲は感情に伴ふもので、自然に調節せらるべきものでありますから徒らに技巧を弄するには及びませんが、此の道理を知つて居ると知らぬとは感情表現の上に、多大の差を生ずるものであります。

身 振 手 振

西洋の雄辯法などには身振手振を主要なものとして論じて居るものが少なくありませんが、あまりに技巧的なるのは私は面白くないと感じまして何事も自然といふことを主といたしたので、身振手振も自然の感情の流露して體を動かす手を動かすのはよろしいが、わざとらしきは學ぶべきことではないと考へます。併し身心は相互に關係して居るものでありますから心に感じましたことは自然に身

に現れまして、慷慨禁ず能はざる時には自然に手を動かし終に卓を打つに至り、
謹嚴なる話をいたします時には身も引き縮るものであります。されば音聲が言
語の足らざるを補ふ如く身振手振も亦其の足らざるを補ふ上に多大の効果はある
もので、之を感動身振、説明身振の二といたします。感動身振と申しますは心に
感じたことの自然に身振手振りに現はるゝを利用して言語の足らざる所を補ふの
で、悲しみを現はす場合には、身は自然に収縮し顔は下を見るやうになるもので
す、それを上を向いて身を動かしながら云うたのでは情が寫らず、怒りを現はす
場合にはすべて緊張するものでありますのを、ニコ／＼として如何に腹が立ちま
すといふても其の情は現れません。身を少しも動かさずに『私はギョットしまし
た』と驚きを示させんとしても其の心は通じませんし、笑ひを現はすのに下た目
勝ちに身體も直立さしたまゝでは可笑しくはなりません。身と心とを相應せしむ
るといふことが感動身振りの根本要義で、歩きながら『私は心から感謝して居り

ます』というた所が眞實とは思はれず、手を振りながら『これが私の痛切に感じ
た所であります』というた所で痛切らしくない。眞に心に感じたならば身は自然
に其の心に相應するやうになるものであります。わざとらしい身振手振は悪い
が、強て情を矯めて身を動かさじとするのもよいことではありません。説明身振
と申しますのは手振、足振は身體の動作によつて言語の足らざる所を補ひ、以て
其の理解を助くるので、仰で天を見といふ時に仰向く態度を取り、俯して地を見
るといふ場合に俯向た姿勢を取り、『大なる哉宇宙』といふ時に両手を圓形に擴げ
たり『小なる哉單細胞』といふ場合に僅に指頭を示したり、『この位の大きさであ
る』と手眞似で示し、『かう一直線になつて居る』と直線を描いたり『此の原因は
三つあります』といふ時に指を三本出して示すの類は説明身振です。

諸君は私がかういふことをしたから（とて指頭にて短銃を引く眞似をし）とて
大事件とは申されませんが、併し今回の歐洲戦亂否、世界の動亂は之れによつ

て出来たと申しても差支はありません。何故かと申せば今回の戦亂の直接動機は埃匈國の皇太子が殺されたことでありませう、皇太子が殺されなかつたら埃匈國とセルビヤとは開戦いたしません。此二國が開戦せずば露西亞も立つまいし、獨逸も起ちますまい、さうすれば佛も英も伊も土も米も日も起たぬことになるのでありますから皇太子の死は世界の大事事件であります。此の事件は何によつて起りましたか、短銃の曳金をかう引いた(手眞似)からであります。の如きは此の身振に屬するのです。其他

或る人が腹が立つたときは一から十まで數へてから怒れと申しました。ムカ／＼と腹が立つたら一、二、三、四と次第に指を屈して行く手眞似)

の如きものも之れであります。これらは主として指示と摸倣とで天を指し地を指し又は圓を摸し直を摸したのですが、其外に言語に聯想のありますやうに、身振を以て英雄を語る時には傲然たる態度、君子を語るときには謹嚴なる姿勢、寒

いといふことをいふ場合には肩をすぼめ、暑いといふことをいふ場合には之れに反した態度を取りて耳より入る言語と共に目より其の姿勢を入らしむるのこともありますし、言語と其の意と相反した反語などを使ふ場合には「えらい人です」と口では譽めながら可笑い態度をするやうな場合もあります。これを暗示的身振と申します。即ち態度によつて言語以外の意を暗示するのであります。

以上は身振即ちゼスチュアの中の動的の方でありますが、一席の演説中にさう手を動かし足を動かしする場合の多くあるものではありませんし、又あまりに手振足振りの多いのは見よいものではありません。で、これらの運動の外に靜的態度を保つて居ることが必要であります。これには身體各部の均整を得しめて、力を臍下丹田に凝めて、泰然として動かざる形に居らなければならぬので之れを靜態とし感動の場合、説明の場合、其の語と相應じて時々身振、手振を試みるも亦舊の靜態に復するやうにせなければなりません。靜は常なり、動は變なりと心得て

其の態度に品格を失はず、且つ感動を現はし、説明を利用して行くことが出来るのであります。

一〇 演説の準備

演説の動機

上來申し述べましたことを纏めて諸君の御参考に便にいたしますと、最初に申しました通り演説といふものは理想と現実との衝突に出発して辯士即ち演者の理想を現實に應用せんとするか。現實を理想に近づけんとするか。の努力でありますから、演説の主題は

- 1、辯士の理想よりするもの
- 2、社會の現實よりするもの

の二つがあります。辯士が一定の主義を以て現實社會を律せんとし、「日本人は酒を禁せざるべからず」と立論してかゝると、日本人が餘りに酒を飲んで醜態を演ずるを慨して「日本人は酒を飲むべからず」といふのは、題は同じであります。

すが議論の立脚は違ひます。前者なれば、醜態有無は論外で、たゞ辯士の主義として主張するのですし、後者なれば辯士の主義は必らずしも厳格なる禁酒主義でなくとも、現狀に慨して論を立てるのであります。併し田から行くも畔から行くも、其の結論は同じことになりませんが、説述の思想内容は大に異つて參ります。

思想内容の整頓

ソコで次に必要なのは思想内容の整頓です。これは是非論理の法則によつて全體の組立を定め、自己の主義を根本原理として現實の事實に論及する演繹的論法を用ふるか、先づ現實の状態を列擧し其の間より根本原理を抽出して行く歸納的論法によるか、又は先づ反對者の迷妄を打ち破つて、而して後徐ろに自己の所信を披瀝する因明的論法によるかを考量せねばなりません。理想よりするものは主として演説法により、現實よりするものは多く歸納法によるを便利といたしま

す。又他の方面から立論の形式を見ますと、建設的と破壊的との二つに分つことが出来ます。建設的の方はすべて解説的になります。破壊的の方は皆な攻撃的であります。一體演説はどちらが樂であるかといへば、云ふまでもなく攻撃的態度で、物は拵えるより潰す方が樂であるやうに攻撃には活氣があらまして、人の感情をそゝるに便であります。或る人の話に人を怒らす演説は一番爲し易く、人を笑はすは之れに次ぎ、泣かすは尤も困難であるというて居ります。攻撃は其の怒らすのでありますから尤も樂なので慷慨悲憤の演説に聽衆の血を沸かし、緻密なる建設的の方策に人を動すの少いのに見ても明かであります。激烈な言には動き易い。動き易いものは暗示を受け易くなつて居るのでありますから能く辯士の言を聴くが、緻密な話には自然沈靜状態にならねばならぬ。沈靜すると群衆の状態を脱して個性が頭を擡げるから暗示は勢ひ與へ難きこととなるのであります。されば建設的の演説には成る可く趣味ある話材を交へ、又は攻勢的の口調を混じ

て聴衆をして常に共通の觀念に置くことを忘れてはなりません。攻撃的の方は聴衆を暗示状態に入れ易い代りに、辯士が又聴衆に動かされ、初めは自分の投げた石が先きに當つて更に反動して自分に當り、又之れを投げれば更に反動し、其の間に勢ひを増して終に心にもないことまで口走るに至るもので、「實に時の勢ひであんな事をいうてしまつた」として後悔するやうなことがないとは云はれぬのでありますから最初から辯論の範圍を定めて脱線せぬやうに心掛けぬと、とんだ失策を醸して取り返しのつかぬ舌禍を蒙るに至るものでありますから、如何に激し來つても冷靜の態度は失はぬやうにせねばなりません。

讀書と觀察

かく主張の目的を定めて思想内容を整頓し以て全體の骨組みを作り、更に話材を蒐集して之れを粉飾するので、それは先きにもいひました通り、讀書と觀察と

而して思索との三つが必要で、多く讀みて材を亡人先輩の言に採り、精しく觀察して證を實驗の中に求め、深く考へて之れを應用するのです。此の話材には

- 一 立證の爲めの話材
- 二 説明の爲めの話材
- 三 趣味の爲めの話材

の三種がありまして、先きにいうた學説とか統計とか事實談とかは證明の爲めの話材となり譬喩は説明の爲めの話材として尤も有効に且つ趣味の話材を兼ねるもので和歌俳句の應用も亦兩者に使はれるのであります。

現實狀態の視察

これらは思想の内容に屬するのですが、敵を知らねば戦争は出來ず。相手を知らねば話は出來ませんから聴衆の現實狀態を豫測して置くことが尤も必要であり

ます。それには先づ聴衆心理の遠因たるべき

一 當該社會の狀態

即ち其の演説すべき地方の事情を知ること、これには

A 天然狀態

イ 氣候 ロ 土地

B 人事狀態

イ 歴史 ロ 現狀

といふ風に觀察せねばなりません。即ち土地の上で申しますれば、山岳周圍して外界の刺戟を受け難い地方と人類文化の中心となり交通頻繁な地方とは其の地方性といふものが異りまして、前者は保守的で後者は進歩的でありますし、氣候の方から申しますれば陰鬱な天候の國と、晴れやかな天候の國とは其の人心に及ぼす影響に大變な違ひがあります。此の土地氣候は直に人事に關係いたしました政

治、經濟、教化の歴史となつたので、其の歴史の結果が現狀となつたのですから日本の内で申しますれば舊藩主の政策は今も其の地方に少からぬ影響を持つて居りますし、人口の多い少いや、産業の豊か豊でないかは、其の國人の氣風に關係し、同じ産業でも農業の盛んな所と商業の盛んな所とは其の狀態が同じではござりません。一應これらのことを視察してから演説にかゝらねば飛んだ失策を來すものであります。極く解りよく申しますれば地方でやる演説を都會でやり、都會でやつた通りを片田舎でやつても共に其の感化が充分でないので明かでありますさて其の次ぎに見ねばならぬのは、今云はんとする問題に就て、其の聴衆の多數は如何なる態度を取つて居るかであります。即ち

二 當該事件の觀察

A 當該事件の經過

B 當該事件に對する態度

となるので、例へば地方改良に就ての演説をしようとしたしますれば、其の地方では地方改良といふことに就て何ういふ風になつて来たか、其の地方人は之れに對して冷淡か熱心かを調べるので、これが充分に解つて居りませんと充分に自分の考へを貫徹せしむることの出来るものではありません。

以上の如くして自分が演説を聴かさんとする人々の心理状態の概要を調べまして、それに就ては如何なる言語を用ふべきか、を考へるので、これは

一 言語の選擇

二 言語の修飾

となるのですが、此事は先きに述べましたから略しますが、一つの演説を組立つるまでには、少くとも之れだけの準備がなくては、自己の思想を他に貫徹せしむることの出来るものではありません。

名士の苦心

されば古來演説家と云はるゝ人々の苦心は並大抵のことではござりません、ダニエル、ウニブスターといへば泰西雄辯家の泰斗と云はるゝ人でありますが、議會の閉會に當り或る問題に就て演説を求められました時に「自分は如何なる問題でも、それを充分に研究して自分の意見を造り上げてからでなければ決して其の問題に就ては論じないのを主義として居るから今直にと云はれては演説することが出来ない」というて斷つたと云ふことでありますし、又或る時此人がハーバード大學の或る協會から寄贈せられた書物に就て滔々と雄辯を振ひましたに就て、聴く者は、さすがはウニブスターである、即席に此の廣長舌を振ふと感心しましたが、彼れは其の演壇を去る時に忘れて行きました壇上の書物を見ますと其の本の中に立派に造られた演説の草稿を見つけ出して、皆く其の用意の周到なるに

感心したといふ話があります。英のシエリダンといふ人は機智横溢、常に準備なき演説をするといふので有名でありましたが其の死後には幾通かの演説草稿があつたといふ笑話もありますし、又グラドストーンは二つの演説の草稿をつくるのに數週間を費したと申しますし、ヂスレリーは議會に於て演説する前にはしばしば草稿を改削し、時には海岸に出て演説をやつたとも云はれて居ります。併し世には準備のない名演説がないとは申されません。自然に迸り出る感動が自然に人を動かす名演説となることもあるのですが、これらも矢張平生準備に心掛けて居る結果、瞬間に其の準備が出来るので、常に此心掛のないものに名演説の浮び出るものではありません。

一一 壇上の心得

辯士の資格

さて漸く準備が出来て壇上に立つて聴衆に面する時、聴衆の之れに對する態度は直に其の演説に影響するもので、其の辯士に肩書とか爵位とかを有するとか、社會に名望があるとかいたしますと、聴衆は未だ一言を發せざる中から渴仰の念を抱いて居りますから其の演説は非常に演よいのですが、聴衆が初めから輕侮の念を持つて居りましたは其の演説は非常な困難に陥らねばなりません。そこで私は聴衆感化の第一を以て辯士の人格にありといふのです。それは肩書とか爵位とかいふ後天的の人格も手傳ひますが、それよりも功のあるのは辯士其の人の先天的の人格です。肩書や爵位が如何に立派でも其の人の人格其者が悪ければ渴仰の念は直ちに輕侮の念と變ずるものでありますから平生が大切で、平生の行ひは直に

壇上の感化力に影響するものであることを忘れてはなりません。豫言者は故郷に入られずとか申しますが、平生を知つて居る故郷に於て感化の出来ないものが何うして他を感化することが出来ませう、島田蕃根と云老人が曾て私に話されたのには吉田松陰はさすがにえらかつた。彼れが經書の講義をする時は郷黨は勿論家族のものまでも喜んで聞いたと云はれました。壇上の辯士は公人でありま
す。八面玲瓏、人に與へて見せしむで、何處から見ても疚しくない人でなければなりません。少くとも其の云はんとする問題に就て少しでも疚しい所があつては自然と言語に淀みを生じて大膽に且つ充分にいふことが出来なくなります。たとへば電燈問題なり、航路補助問題なりで論ずるとして、自分が、賄賂を貰つて居るとか、買収せられて居るとか、又は頼まれたから仕方なくやるとかいふことでは、斷じて人を動かすことの出来るものではありません。御雇辯士や演説遣ひの如何に立派なことを申しても、それは衷心の聲でありませんから人に感化を與へ

ることが出来ないものであります。演説は辯士自身の眞實なる告白でなければなりません。眞情は人を動かします。私は眞實といふことを辯士の第一の資格とせねばならぬと力説するものであります。

自信と態度

眞實は自信を産みます。虚偽には他の批難を恐れる畏怖の念があります。内に少しでも畏怖の念があつては、思ひ切つて物を言ふことが出来ませんから、其の態度はソワ／＼として其の素振りに落ちつきを缺きます。輕佻なる態度は侮蔑を招くの本、落ちつかぬ素振りには不信任の因であります。批難雨の如くに下るとも我れは我が眞實とする所を語るといふ自信があつて毀譽に動せざる膽力は得らるゝのであります。ルポンの申しました如く群衆は強固なる意志を求むるものでありますから自ら信する篤ければ批難も攻撃も之れを屈服せしむることが出来るの

であります。壇上の戦士は怯懦ではありません。怯懦なるものは却て聴衆のために自己の所説を貫徹せしむることの出来るものではありません。併し演説は自ら喋るのでなく、人に聴かすのであります。既に聴かすといふ以上は聴衆に向つての注意が必要であります。聴衆を理解せずして、獨りで懸河の辯を揮つても、それは的なきに放つ鐵砲であります。ソコデ次ぎに心得べきは、

聴衆と會場

のことです。即ち聴衆の種類は雑多であるか、單純であるか、言を換へていへば老若男女入混れる一般群集か、青年とか、老年とか、婦人とか又は職工とか、商人とか、農業者とか、學生とかいふ或る特殊の群衆かを觀察して、それに對して共鳴する所あるやうに話さねばなりませんし、其の會場に聴衆が密集して居るか空席が多いかを見ねばなりません。先きにも申しました通り、密集して居る場合

は暗示を與へ易いですが、空席が多い時は暗示が與へ難いからであります。かゝる場合には成るべく聴衆をして辯士の面前に密集せしめ、聴衆の眼に空席の見えないやうにすることが必要であります。即ち後方に空席があつても、それは聴衆には見えないのですから、多くの害はありませんが、辯士と聴衆との間に空席がありましたは、辯士と聴衆との一致を阻隔することになつて、苟もすると聴衆の心理をして群衆の狀態より個人の狀態に復歸せしむる弊を生ずるものであります。聴衆の視線は常に辯士に集注せられて他に放散せしめられないやうにせねばなりませんから辯士の演壇の附近を人が往來したり、又は他に聴衆の視線を奪ふやうなことがあつては、折角一致して居る辯士と聴衆との關係を破ることになるのでありますから、これらは司會者の方で充分に注意せねばならぬことと思ひます。それから尙ほ辯士の注意すべきことは會場の種類であります。我が國では何れの所にも公會堂があるといふわけではありませんから、學校とか劇場とか寺院とか

が應用せらるゝことが多いのです。此場合に於て學校の場合と劇場の場合とは非常に其の感化力が差異を生じますので、劇場は聴衆が無責任状態に陥り易いから煽動的の演説は學校より都合がよろしいが、理解力に與へるといふことは聴衆が多少とも責任を感じて居る學校の方がよいのです。これらのことは豫め注意して置くことが必要ですが、壇上に於ても常に此の心掛けを忘れてはなりません。

音聲の透徹

かく聴衆と會場とを看取して、自己の主張を聴衆に貫徹せしむるには其の媒介者たる言語が聴衆の耳に入らねばならぬのでありますから音聲が貫徹せなければ折角の演説も何の功をも奏せぬのですから、會場の隅から隅までに行き渡るやうに言はねばなりません。聞えなければ聴衆は個性にかへつていろ／＼なことを喋り出しまして喧燥を極めるのですから聴かすといふには聞えるやうにせねばなり

ません。それには聲を大きくして聴衆の耳に入れるか、聴衆が耳を濟して聞くやうにするかの二つですが、聲を大にして聴衆の喧燥を壓服するといふことは勞多くして功は少いのです。それよりも聴衆をして耳を濟して聞かしむるやうにせねばなりません。かくするには先づ聴衆の視線を辯士に集注し、辯士の一言をも聞き洩さじとせしむる態度を執らしめ、かくて次第に音聲を高めて聴衆の耳より深く心に入るやうにするのが必要であります。それには

一、發音の明確

二、音聲の統一

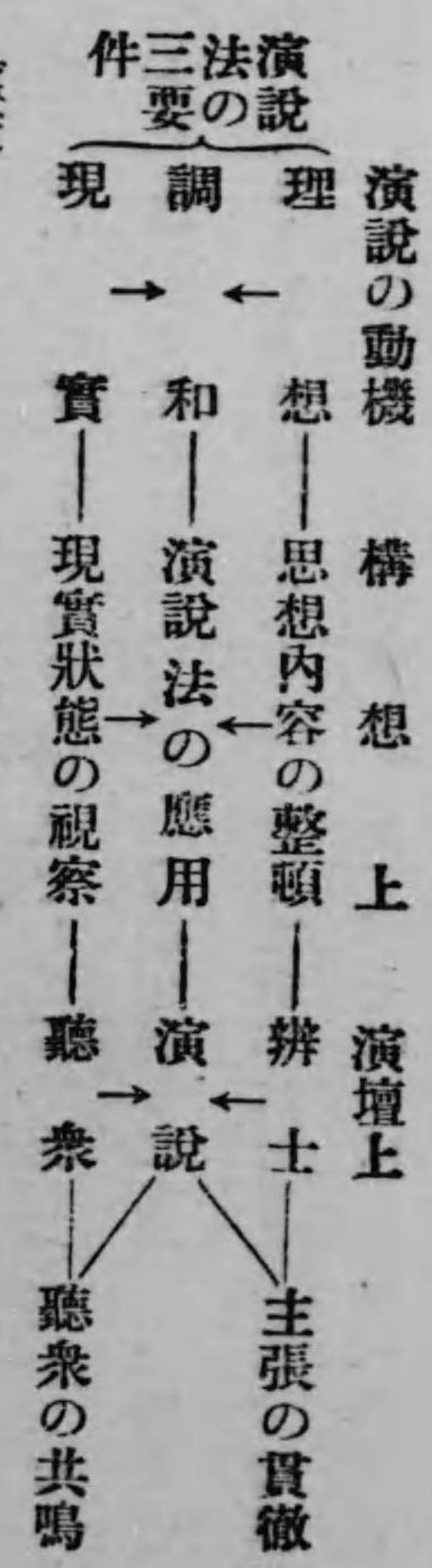
三、音聲の變化

四、音聲の調和

が必要であります。發音が明確でなければ聞き取り難く、始中終、音聲が統一して居りませんでは聴衆の感興に變化を與へまして、初めは大きな聲であつたが、次第に噎れて不快を感せしむるやうでは面白くありませんが、さればとて始中終同一音調で何の變化もなければ無趣味で甚しきは睡眠を催すことゝなりますから

抑揚あり高低あり、しかも調和を欠かぬやうにせねばなりません。
 かくて辯士の理想は聴衆の現實と調和せらるゝに至るので、此に於て辯士の主張は貫徹し、聴衆は之れに共鳴することとなるのですから、以上述べたことを圖表にして示しますと、左の如くなります。

圖 表



長々御話いたして参りました演説法もこれで一應其の大意を説き了りましたで最後に辯士と聴衆との關係を見る一例を擧げて此講話を終ることにいたします。

二 演説の實例

辯士と聴衆

私は辯士と聴衆との間が如何に結びつけられて行くかを示すが爲めに有名なるシエクスピヤーの書きました戯曲シーザーの中のブルータスとアントニーとを擧げ、それに對して言語其他の注意を示し、且つ此戯曲が如何に群衆心理の状態を描くに妙を得て居るかを併せて見ることにいたしませう。讀者此の一例を模範として他の演説を聞き、又は讀む場合の御参考にせられたならば得る所は斷じて少からずと思ふのであります。

ブルータスの演説

此演説はブルータスがシーザーを刺殺して羅馬市民に其の理由を説明せんと

するので。先づ、

羅馬人よ、國人よ、親しき友よ、(頓呼) 予は今、諸君の賢明なる批判を請はんとするのであります。(先づ聴衆を尊重して其の自負心に) 諸君は何卒賢明な批判者たるの態度を以て公平なる判断を下されんことを望むのであります。かくて彼れは熱狂せる聴衆を静かならしめたのです。さて、

諸君、若し此群聽の中にシーザーの眞の親友といはるゝ御方がお出になりますならば私は其の人に對してブルータスがシーザーを愛する心も決して其のお方に劣らなかつたといふことを斷言いたします。

(自己のシーザーに對する態度を明にして) 然らば何故ブルータスはシーザーに刃を加へたかとの疑問を發せらるゝのでありませう。私は直に答へます、それはシーザーを愛する心が薄かつたのではなく、ローマを愛する心が更にそれよりも厚かつたからであると(問答) 諸君はシーザーが生存するが爲めに、すべての人が奴隸

となつて死ぬのを望みますか、シーザーが死んで、すべての人が自由の民となるよりも(兩々相對して) シーザーは私を愛して呉れました故に、私は彼れの爲めに泣きます。彼れは好運であつたが故に私は喜びます。彼れは勇敢であつた故に、私は彼れを尊敬いたします。(重語法) 併しながら(頓) 彼れは野心を抱藏しました故に、私は彼れを誅戮いたしました。(先の伏案はこゝに至るのです) 愛に報ゆるには涙を以てし、幸福を祝ふには歡びを以てし、勇敢を稱するには名譽を以てし、野心を罰するには死を以てするのであります。(前の語と相照應して) 諸君、諸君の中に奴隸となるのを願ふやうな卑劣なお方が一人でもありますか、有るならばお言ひなさい。私は、其の人に對しては罪を犯しました。諸君、諸君の中にはローマ人たることを欲しないやうな野卑なお方が一人でもありますか、あるならお言ひなさい。私は其の人に對して罪を犯しました。諸君、諸君の中に此の國を愛しないやうな卑劣なお方が一人でもありますか、あるならお言ひなさい。私は

其の人に對して罪を犯しました(同一間隔を置て同語を繰返す一種の反覆法)

ブルータスの此演説は聴衆の心を動かしまして「無い〜」の聲は頻りに起りました、彼れは

然らば予は何人に對しても罪を犯したことはないのです。シーザーに對して私の爲たことは、諸君が又ブルータスに對してもなさるべきです。

と、其の自信と膽力とを群衆の前に示して、最後に彼れは誇張したる一種の反語を以て

私はローマの幸福の爲めに無二の親友を殺したのでありますから、私は此同じ短劍の私の身に用ひられんことを望みます、……若し我國が私の死を願ひます時がありましたならば……

と、ういて萬歳の聲の中に彼れは壇を退いたのであります。國人は歡呼してブルータスを迎へました、これに對するマーク、アントニーの演説は非常に困難であります。

ます。

アントニーの演説

アントニーは今、聴衆の喝采したブルータスの演説に反對せんとするのであります。而して彼れの劈頭の語は意外にも、

ブルータス君のお庇陰で、私は此の壇上に立つことが出来ました。(先づ同じて而して徐ろに異手段です)

親友よ、羅馬人よ、國人諸君よ、御清聴を煩したい。私の此處へ参りましたのは、シーザーの葬儀を營まんがため、決して彼れを賞讃せんためではありません。(自己の態度に對して先づ聴衆の反感を防ぐ)凡そ人の行つた悪事は死後までも遣りませんが、美事は往々にして骨と共に埋もれてしまふものであります。(一篇の大主眼。彼れの演説は之れの細説です)シーザーの如きも亦さうしてしまつた方がよいです(反語)ブルータス君はシーザーは

野心を抱藏したと申されました。果して然らば、それは甚だ慨はしい罪過であつて、シーザー又其の爲めに痛ましい報いを受けたものと申さねばなりません(二び群衆に同じて)ここにブルータス君並に其他の人々の許しを受けまして、……此のブルータス君は公明正大なお方であり、其他の人々も公明正大なお方であります(此語は以下反覆して用ひて、終に反語の意味とする反語法です)私は今其の人々の許を得てシーザーを葬るの辭を述べるのであります。

彼れの演説は實に堂々たるものであります。

シーザーは私の親友でありました。私に對してはシーザーは忠實な、公平な友でありました。しかしながらブルータスは彼れは野心を抱藏したと仰せられました。其のブルータスは公明正大な人であります。(反語)シーザーは曾て多くの捕虜をローマへ伴ひ還りました。而して其の償金は悉く國庫へ收めました。此のシーザーの仕打が野心家らしく見えませんでしたでせうか、シーザーは曾て飢餓

に泣く貧民の爲めに涙を流しました。野心はもう少し峻酷なものと思ひます。しかしブルータスは野心を抱藏したと云はれました。此のブルータスは公明正大な人であります(反語)諸君はいづれも御覽になつたでせう、リユーバアカルの祭日に、私は三たびまで王冠をシーザーに捧げました。しかも、彼れは三度まで之れを辭しました。あれが野心でありませうか、しかしブルータスは野心を抱藏したと云はれました。此のブルータスは公明正大な人であります(反語)私は決してブルータス君の言を攻撃せんとするものではありません。唯だ私の知つて居る事實を語るのであります。(事實は群衆を動かす尤も有力なるもの)諸君は曾てシーザーを愛してお居でになりました。それは理由がなかつたのではありません。然らば諸君は今如何なる理由で彼れを哀悼することを躊躇せらるゝのでありますか、(録録漸く露る)たゞ判斷力……理非を判する力は今は失はれたのでせうか。

激語一番、聽衆を首肯せしめたのです。此間に聽衆の態度は漸次に變化して参り

ました。彼れは暫時沈黙して此の状況を看取し、さて語を次ぎ、

昨日まではシーザーの一言は全世界に匹敵することも出来たのです。其のシーザーは今や此處に横はつて居るのであります。如何なる卑しき者も尊敬の意を表しようとはしないのであります。(今昔を對比して聴)諸君よ、若し私が假りにも諸君を煽動して憤慨せしめ、激昂せしむるやうなことがあつては、取りも直さず、ブルータスを傷けカシヤスを傷けることになるのであります。彼の人々は諸君の御存じの通り公明正大なる人であります。(反語の功愈々現はれて、彼れが言外)私は彼の人々を傷くるよりは寧ろ世に亡き者を傷け、自らを傷け、諸君を傷けた方がよいと思ふのであります。

彼れはかくて修辭的の巧妙なる演説を以てローマ人を煽動し、更にシーザーの柩を公衆の前に開いて、其の外套を指し、

御覽なさい、これ此處をカシヤスの短劍が刺したのであります。御覽なさい、

奸賊カスカがどんなに斬つたかを、此處をば子のやうに愛せられて居つたブルータスが貫いたのだ。彼れが憎むべき刃を抜き取つた折に、御覽なさいシーザーの血は其の後を追うて流れ出たのであります。

と最も群衆を動かすべき事物を眼前に持ち來つて、感情に訴へて幾多の想像を描かしめ、シーザーの死はローマの倒れたのであるとまで絶叫しました。此時の群衆の情は全くアントニーに魅せられて、先きにブルータスに歡呼したとは全く別人の状態になつて居ります。彼等はブルータス攻撃に熱して暴擧をもしかねまじきまでに至つたのであります。アントニーは、

親切なる諸君、私の申したことが本となつて諸君が憤激して暴擧をせられるやうなことがあつては大變であります。此度の事を行つた人々は何れも公明正大な人であります。(公明正大の語は此に於て全く冷評の語)如何なる私の怨みや憤りがあつてせられたかは私の知る所ではありませんが(此に於て自己の云はんと)彼の人々

は賢明であり、公明正大でありますから道理らしい幾多の辨解はせらるゝでござりませう。(先づ敵の辨解)併し諸君、私は諸君の心を盗まうとして参つたのではありません。私は亦ブルータスのやうな雄辯家ではありません。唯だ撲實な友を愛することだけを知つて居る男であります。それを知つて居ればこそ、彼等は私にシーザーの爲めに演説することを許したのであります。私は才もなく學もなく、徳もなく、且つ辯舌も拙く、身振もまづく、到底諸君の血を湧かすやうな演説は出来ません。たゞ眞直ぐに諸君の知つて居らるゝ事實其儘を諸君の前に述べて、此の懐かしい、しかも憐れな、物をもいひ得ないシーザーの傷口をして諸君に語らしめたのに過ぎないのです。

といひ、最後に、

若し私がブルータスで、ブルータスが私でありましたならば、必らず諸君の心を攪亂してローマ街頭の石をも起たしめ、忽ち暴動を起さすやうな雄辯を、シ

ーザーが一つくの傷口から發せしめたであります。

と彼れは實に巧みに群衆心理を利用して終に群衆を憤慨せしめたのであります。

自己の工夫

以上は唯だ兩人の演説の梗概を擧げて、少しく修辭上の注意點を示したのであります。諸君は古來の多くの演説例について自ら其の注意點を考へて工夫に資し、且つ成るべく多く御聽きになり、成るべく多く御考へになり。成る可く多く演るといふことが必要であります。理屈が解りましても實際に聞いて、どの程度まで應用せられて居るかを考へ、自分も亦實際の經驗によつて之れを自得することがなかつたならば、理論と實際とが離れゝになつて其の功を失ふものであります。何事も自家の工夫であります。今は其の工夫の要點を説いたに過ぎないのです。

演説法講話終

演説法講話附録 演説の性質と職分

談話の形式

修辭學者は一般に文句を綴る上に於て叙述、物語り、解釋、辯論の四つの分類をなして居る、是等のものは其主要の目的たる思想の表示と云ふ點に關しては別段異なつてをる所はないが、唯形式上に於て各々特殊の目的に對つて活らく文句の綴り方が異なつてをるに過ぎないのである。即叙述の場合には或る事物の想像——一片の事物の想像が描寫せらるゝのであるが、物語の場合には相互的關係に在る出來事の徑路が現在恰度起つて居るものゝ如くに表示せらるゝのである。而して解釋は一般の眞理に關する觀念、事物の性質を説明するものであつて辯論

は専ら提議の眞偽如何を證明するものである。

上述の如く文句を綴る上に於て四通りあるが其眞理を説くと云ふ根本の目的に就ては何等異なる所はないのである。唯文句を綴る上に於ての各別の目的は單に其附屬的のものとも認めらるべきで、例へば作家は美しい描寫を爲す事も出來ようし、又は一軍隊の功績を物語り、英國々會の制度を説明する事も出來よう、次で如何に豫選法が許容せらるゝかと云ふ機能を證明する事も出來よう。今、其何れの場合を見ても作家の論據は理性に訴へるものであつて此目的に重きを置き力を注ぐ以上、文句の綴り方は此四分類の作用の一つに依らなければならぬものである。

各文體の目的とする所は單に眞理の爲に眞理を説くと意中を傳達せんが爲めに眞理を説くと云ふ許りではなく尙ほ夫れ以上有力なる効果を擧げんとするのである。茲に眞理と云ふのは即ち人々を刺戟して或る行爲を爲さしむる所の希望に應

するやうに表現せらるゝ所のものであつて吾人が叙述をするとか談話をするとか又は説明をするとか、若しくは議論をするとか云ふのは單に傳達せんが爲め又は理性に訴へんが爲めのみではなく、或る方向に行動す可き所には行動し、行動す可からざる所には行動す可からざるやうに吾人々類を説服すると云ふ事が唯一の目的であらうと思ふ。此條件の實行に必要なのは、即ち直接間接に感情に訴へると云ふ事であつて説服するやうに努力すると云ふ事は即ち此の如く議論の根底ともなるものである。此訴へると云ふ事は他の作用に見るやうに元來理性に對する根本的のものではなくて、感情に對してのみ獨り言ふ事が出來るのである。従て茲に單に傳達と云ふ目的、智識と云ふ目的以上に感情を刺戟して其意志に感動を與へると云ふ最高の目的が生じて來るのである。吾人は演説の形式として描寫とか談話とか叙述とか若しくは議論とか種々の事を云つてをるが其形式の如何に關せず説服の要素にして有力なる主意ならんには其れを組み立てたる措辭は直ちに雄

辯的演説の範圍に當て箴められるものである。

演 説

演説は公演述の豫備行爲とも稱すべき談話の形式であつて人々の行爲を指導し感化を與へる所のものである。

此演説は其特殊の目的に附加して音量の充分ある言ひ表し方に殊に適應するやうな嚴格な形式を要すべき特質を有つたものである。あらゆる能辯的措辭の表象とも云ふべき演説は現實と理想との間に起る衝動から出て來たものであつて人が理想的方向に赴かんとする傾向を表彰したものである。即ち社會の現制度を理想に調和せしめて之れに近づかしめんとする希望を言ひ表はすものと云つて差し支へないと思ふのである。吾人は絶えず完全なる生涯を夢見て居るが而かも現世に於ては現實と理想と一致し難いものであると云ふ事をやがては充分了解するもので

ある。此兩者の衝動の結果は如何にして現實と理想とを近づかしめんかと云ふ根本の問題に逢着する、斯の如くにして、吾人は茲に各個の眞の演説に於て、其根本問題の解決に近づかんとする三つの見地があり、其の見地に相應する三つの明かな思想の作用を知るのである。即題目、對偶、總合法と名付くるものである

題 目

演説の題目と云ふのは一般の原則を叙述するのである。即ち、假令人類の實際的行爲に依て認容せられなくとも學説として一般に認めらるゝ所の一般の眞理を説明するのである。而して其論説には一種の假定力が有ると同時に完全なる叙述以上に多少苦心して修整すると云ふ觀念を要する。其最も好適例として吾人は時々之を専門學校の演説などに見る事がある。特に「不定の哲理」と云ふ題目の下に述べられた演説の如きは其優秀なる適例の一つとして見ても宜からうと思ふ。

論説に於て、其の話を進めて行く上に、時に或は頗る意見の一致しない事がある。即唯僅かに五六の人に依て是認せらるゝと云ふ事も有り又は大體に於て認められないのが一般の眞理である事もある。斯やうな問題の適例は好く内亂の時に
行はるゝ幾多の演説の中に見る事が出来る。即ち同盟の賛成者及び蕃奴の左袒者
は共に同盟の盟主等が自己の論據とする論説に直接反駁すると云ふやうな論を行
る事がある。西曆一八六一年三月廿一日に『アレキサンダー・エツチ・ステイフン』
は『ジョージア』の『サバナデー』同盟の政策の爲に或演説を試みたが實に此演説は
當時の演説中其模範とも云ふべきものであつたのである。尙ほ夫の有名なる『リ
ット、オブ、アツシスタンス』と云ふ演説中に見る論説は又其模範的好適例たる
に恥ぢないものである。此の演説中に於て『ジェームス、オテイス』は生命財産享
有の權利は現社會に於ける人類固有の自然の權利であり且又英國社會の事實傳説
に依て是認せられた當然の權利であると云ふ主義を啓發したのである。此論旨は

一般に認容せられたもので、従て其述ぶる所は反對的論旨に對する破壊的分子を
含んで居らなかつたものである。

對 偶

と云ふのは論説中に述べられた眞理の完全な實現に反對して現社會に於ける實
際生活の表象を述べんとするものである。彼の『ジェームス、オテイス』は曾て述
べた所の演説中に『リット』なる題を説いて大英國の政策を論ずるに當り彼は其對
偶を表示したものである。即ち彼は言をなして、大英國の此政策は『リット』の論
旨に明言せられたる永續的發達の自然權と相容れざるものであると説破したので
ある。

總 合 法

と云ふのは提供せられた問題の解決を與へんとするもので、即ち現實をして理想に一致せしめ得べき手段として講せられたる方法とも云ふべきものである。

附加の例證

其他尙ほ演説の優力なる例證は「ウエリデル、フィリップス」の爲したる講演中に見る事が出来る該講演中に於て、フィリップスは奴隷排除に就て辯護して居るフィリップス氏の論旨は常に民政主義的理想に發し法の制定以前の人類の如く總て平等無差別たるべしと論じてをるのである。彼は對偶の筆法を以て奴隷制度の政治上、經濟上、將た又社會上に有害であることを述べ、次で總合法の筆法に依て和解に關するあらゆる企圖の無用なる事を説示し奴隷廢止を唯一の實際的解釋として辯護したのである。

又有名なるリバープール演説に於てヘンリー・エドワード・ビーチャーは其同

じ問題に關する經濟上の状態を述べて居る。彼は生産者の自由と分配者の自由並に消費者の自由として解釋した所のアングロサクソン民族の普通の政廳及通俗の産業に就ての觀念の全般的なる事に論旨を置いてをる。次で彼は充分圓熟せる口調で奴隷なるものは此根本概念と全然相容るゝ事の出來ないのもであると絶叫し奴隷廢止を以て實に總合法の必要なるものとして提言したのである。

傳記に關する演説

は幾多の研究者に、研究上眞面目な痛苦を感せしめたものである。彼等は此種の演説は何れも他の論説の發達に必要なると同様な思想分子を含んで居るものと誤解して居る。之れが爲めに幾多の所謂傳記演説は幾多の偉人の生涯を寧ろ無趣味に回顧するに過ぎぬと云つても可いのである。

然しながら今若しも研究者が自己の題目を一の大原則の合體として研究の道を

進むるならば此偶々遭遇した如上の困難は除去する事が出来ると思ふ。然らばド
ンナ真理を以て傳記の主眼を描寫する事が出来るか、又如何なる真理に於て研究
家の生涯と職務とが不正の者に對抗するに足るものとして認められ得るであらう
かと云ふに、傳記演説は聖人及偉人の著書中に見る通りに理想の力を表現し而し
て生涯を人類の幸福、社會の進歩に貢献する所のあらゆるもの、實現に努力する
やうに鼓吹せんとするものである。彼の西曆一九〇六年九月二十三日に「シカゴ」
の聴衆所で上院議員のジエー・ビー・ドリバーが述べた所の故大統領マツキンレー
氏に冠した頌詞は實に傳記演説の最近の實例である。此演説に於てドリバーは民
主黨の支配權が窮極せる人格及び公民の理想の合體として大統領マツキンレー氏
の品性を討論したのである。而して暗殺者の行爲は民主政府を脅かす所の道徳上
の廢類、政治上の腐敗の具體的適例として解釋せられたのである。

上述の解釋即總合法は善良なる總ての亞米利加人が最良の公民たる事に耻ぢざ

る各個の道徳上政治上の感化を與へることに於て盡くすべき義務たるべきもので
ある。

適合の法則

茲に演説の豫備行爲として此措辭の形式に特有なる二三の問題が生じて来る。
演説家は何事かを話す可きは勿論であるが尙ほ又演説する所のものが、聴衆の智力
上道徳上の特質を正しく考慮して演説せらるべきものたるは重要な事で、此條件
に添はんとする事は實にその成功に絶對的必要なものである。今假りに聴衆が無
學であるとしたならば彼等の智力に刺戟を與へるようにする事が必要である。又
彼等互に敵意を有つてをると云ふ事であるならば、友情を説いて彼等相互の情緒
の融和するやうに努むる事が必要である。今若しも彼等が互に同等のものである
ならば彼等の興味は確かに喚起せらるゝに相違ない。之を一言にして言つて見れ

ば公演述に對する演説の準備に於て勢ひ有り得べき許多の偶發的出來事は之を豫期しなければならぬのである。吾人が茲に特に切言せんと欲する事は即ち演説家なるものは聴衆の先入せる心的状態に應じて傳達の要務を果すと云ふ事の必要である。

題目の撰擇

演題の撰擇に就いては、其の選ばれる演題は演説家の才能と特性に適つて居るものでなければならぬ。即其時機に投ずるものであり聴衆の能力と必要とに適應するものでなければならぬ。凡そ人生に關係し、人事の問題に興味を有する人は屢々此興味このきょうみの暗示に依て演題を撰擇するのである。然しながら一般に「時事問題」と稱する所のものに殆んど何等の考量をも有つて居ない人に取ては此所謂演題の撰擇は一向要なき仕事であるかも知れない。且又人格に關する重要な事を

不眞面目ふまじめに觀て居るやうな人には、南瓜なぐさの價格位に就ては論ずる事が出来るかも知れぬが到底群衆を左右するやうな辯才は之を認むる事が出来ないものである。人若し演説家を以て自から任せんと欲するならば先づある重大なる問題に誠意を以て携たづさはる事を要する。即ち彼が其問題に關係せんとするのは一般の稱讚を博したいと云ふ希望の爲ではなく寧ろ興味に依て刺戟せられたものでなければならぬのである。此興味あつてこそ熱情を生じ、此熱情あればこそ雄辯の生命たる印象を與へる事が出来るのである。凡そ演説家たる者は自己の問題に關しては最も深甚なる自信を有つて居る事を要する。是れは實に雄辯を成立せしむる所の要素とも云ふべきものである。然らざれば如何なる名聲ある人の言語も單に一時的の効果を齎らすに過ぎぬものとなり了るであらう。實際眞面目にやるならば問題の非なる方面を辯説して居る所の人でも不眞面目に自己の自信と相背反する眞理を説いてをる人に比較して其優る事は萬々である。

問題が餘り六つかし過ぎて充分に討論が出来ないものは寧ろ之を避けた方が宜い。言葉は實に思想を表示する道具であるから若しも自己の心的作用を超越して或る問題を論せんとならば其は單に意味なき語句を並ぶるに過ぎぬものとなつてしまふ。吾人が苟くも或る問題に就て公然と論せんとするならば其問題に就ては確實に精通してをると云ふ前提が必要である。

次に一方初學者は經驗と云ふものが必要である。無經驗の儘に放擲してはならぬ。無經驗と云ふことは實に初學者の進歩を阻止するものである。又初學者は威嚴あるやうに、活氣あるやうに問題を論ずる事の出来ないのは自己に圓熟せる學問上の智識が無いからである。即ち『雄辯は天上に在らずして地上に在る』のである。凡そ如何に卑しい初心者が如何に無經驗であつても或る一政策の正不正に就ては自信も有し、理想も有つてをるものである。且又歴史上の

事實、流傳せられたる事件等に關しては多少理解もしてをるものである。

一體題目の撰擇は其時機に應じて行ふ事が必要である。此要件が即ち演説の特殊の目的を決定する所のものとなるのである。而して時機は一般に聽衆の性質に影響を與へるものであるから演説の語調も流儀も、此考へに準じて案出せらるゝ事を要するのである。

今専門校、大學等で行はれてをる演説上の辯論を觀るのに、主に現代の問題に適合した題目を撰擇するのが一般普通の有様となつて居るやうだが、斯くの如くして研究生は漸次一般世間に關する諸種の問題に圓熟して來るやうになる許りでなく、更に學校生活を離れてから廣く逢着する社會上の諸問題を討論する好機會を得るやうになつて來るのである。